

# 久高島の初穂祭(朝拝み)と穀物起源伝承

## — 島の 祭 祀 —

### 一 はじめに

#### 1 麦と粟の穀物儀礼

**麦と粟の四つの穀物儀礼** 沖縄県久高島では、現行の穀物儀礼として次の四つの儀礼が、両ノロ(外間ノロ・久高ノロ)の司祭のもとで外間殿と御殿庭(久高殿とも)では同じ形式で執り行われている。その四つの穀物儀礼とは、麦の穀物儀礼として①麦の初穂祭(祭日は一月の中の壬から二日間、かつては二月の中の壬から二日間。以下、月日は旧暦)と②麦の収穫祭(三月の中の壬から二日間)があり、粟の穀物儀礼として③粟の初穂祭(五月の中の壬から二日間)と④粟の収穫祭(六月の中の壬から二日間)である(表1参照)。久高島には代表的な七つの祭り(七祭りという)があり、そのうちの四つがこの穀物儀礼である。

なお、久高島では稲作が行われていないので、稲の穀物儀礼はない。

## 島 山 篤

表1 久高島の現行の麦と粟の穀物儀礼の祭日・司祭者・祭場

儀 礼 名	祭 日	司 祭 者	祭 場
① 麦の初穂祭	一月(かつては二月)の中の壬から二日間	両ノロ	外間殿・御殿庭
② 麦の収穫祭	三月の中の壬から二日間	両ノロ	外間殿・御殿庭
③ 粟の初穂祭	五月の中の壬から二日間	両ノロ	外間殿・御殿庭
④ 粟の収穫祭	六月の中の壬から二日間	両ノロ	外間殿・御殿庭

どの穀物儀礼もほぼ同じ形式で外間殿と御殿庭で執り行われるのは、外間村の祭祀センターが外間殿、久高村の祭祀センターが御殿庭であり、両村が合同で祭りを執り行っているからである。それで、外間ノロ(外間村の最高神女)と久高ノロ(久高村の最高神女)が司祭者になっている。なお、外間ノロは公事ノロ(首里王府の任命した公式のノロ)、久高ノロはシマノロ(村落共同体のノロ)で、格が異なる。

**初穂祭の別称** 初穂祭は「穂祭り」であり、シチュマ、シチマ、シキヨマ、シキユマ、スコマ、ミシキヨマともいう。『沖縄文化史辞典』「一九七二、一七〇・一七一頁」の「シチュマ」の項目によると、「未熟の穂を積んで神に捧げ、これに石の実、金の実が入って充実させて

下さるようにと祈願する祭であろう。(中略) 沖縄語でシチュ(シキヨ)というのは実質の事で、実質のまだ充実しないのがシチュマ(マは小であらわし、弱・若等の意味でまた愛称にもなる。日本語の子と同じ用法である)とある。また、『沖縄大百科事典(中)』「一九八七、三〇五頁」の「シチマ」の項目(湧上元雄)によると、「シチマの語源は、ススキや稲の聖名のシキヨに小さいの意のマであろう」とある。こうしてみると、シチュマ、シチマ、シキヨマ、シキユマ、スコマは、穀物を生み出す植物が穂をつけ始める成育状態を指し、同時に実の充実を祈願する初穂祭の義になっている。ミシキヨマのミは敬語の御で、初穂祭を敬った言い方である。

この初穂祭を、島では「マブッチ祭り」とも「精進祭り」ともいう。それは、初穂祭ではマブッチ(麦・粟のお粥)を神饌とし、また厳しい精進(禊など)をともなっているからである。また、祭日から麦の初穂祭を「正月祭り」ともいい(かつては二月だったので「二月祭り」といったろう)、粟の初穂祭を「五月祭り」ともいう。

**収穫祭の別称** 初穂祭を穂祭りというのに対して、収穫祭を「大祭」という。

収穫祭を島では「お盆祭り」ともいう。お盆とは神饌、ご馳走の義である。この祭りでは、神人に対してお盆、すなわち神饌、ご馳走をたくさん差し上げるからである。また、祭日から麦の収穫祭を「三月祭り」、粟の収穫祭を「六月祭り」ともいう。

**祭料** 祭料は耕作地の面積に応じて供出する。すなわち、一地(三六〇坪)あたりいくらか決め、麦の穀物儀礼では麦を、粟の穀物儀礼では粟を供出する。ただし、現行では麦も粟も栽培していないので、どの穀物儀礼でも米を供出している。

久高島には地割制度があり、耕地は正人(二五歳から七〇歳(数え歳、以下同じ)の男子)に平等に割り当てられている。島の耕地は一

〇組に分けられ、一組は建前では一五地から成っている。したがって、正人として地を得ることは、穀物儀礼の祭料を供出する義務を負うことであり、同時に上納(納税)の義務を負うことでもある。

## 2 朝拝みは島の祭祀、夕拝みは王府の祭祀

**穀物儀礼(初穂祭と収穫祭)の次第** この四つの穀物儀礼は、基本的に一日目の「朝拝み(朝祭りとも)」と二日目の「夕拝み(夕祭りとも)」から構成され、初穂祭に限って「精進」が付随している(表2参照)。また、初穂祭の朝拝みと一日目の夕拝みには大漁祈願を趣旨とするフカラクも付随し、収穫祭の朝拝みと一日目の夕拝みには大漁感謝を趣旨とするクカウーが付随している(ただし、一日目の夕拝みにフカラクとクカウーが付随するのは誤伝のようである)。このフカラクとクカウーは穀物儀礼と直結しないので表2に記さないものの、島の穀物起源伝承と深くかかわっている(後述)。

表2 久高島の麦と粟の穀物儀礼(初穂祭と収穫祭)の次第の一覧表

月日	時刻	次	祭場
一日目	朝	朝拝み(朝祭りとも) 初穂祭に精進が付随する	外間殿・御殿庭
一日目	夕	夕拝み(夕祭りとも) 夕拝み(夕祭りとも)	外間殿・御殿庭
二日目	夕	夕拝み(夕祭りとも)	外間殿・御殿庭

**久高島と王府の穀物儀礼** この四つの穀物儀礼は、現行では久高島の神人だけが執り行っており、どの儀礼も久高島の穀物儀礼のように見える。

しかし、首里王府の編纂した文書『琉球國中山世鑑』・『中山世譜』・『琉球國舊記』・『琉球國由来記』・『遺老説傳』などによると、

首里王府が瓦解する一八七九年(明治一二)以前には、王府が麦の穀物儀礼を久高島で執り行い、稲の穀物儀礼を知念・玉城で執り行っていた。そして、この久高島での麦の穀物儀礼のうち麦の初穂祭を国王(後に代理人)が隔年に執り行い、知念・玉城での稲の二つの穀物儀礼のうち初穂祭を国王が毎年、執り行っていた。

やがて王府が瓦解し、その結果、当然のことながら王府が執り行った穀物儀礼は廃絶している。王府が執り行った四つの穀物儀礼のうち、知念・玉城で執り行った稲の二つの穀物儀礼は、形骸もなく、既に完全に隠滅している。この伝でいくと、王府が久高島で執り行った麦の二つの穀物儀礼も隠滅している、と推定できる。現に、久高島で執り行われる現行の麦の二つの穀物儀礼がすべて島だけの穀物儀礼だ、と誰もが何の疑問もなく思っている。

**朝拝み(精進を含む)は島の祭祀、夕拝みは王府の祭祀** しかし筆者は、麦の二つの穀物儀礼のうち、「朝拝み」ならびに初穂祭の朝拝みに付随する「精進」が久高島の穀物儀礼であり、「夕拝み」が王府の穀物儀礼だった、と想定している。

**精進と朝拝みは一組の祭り** まず、ノロをはじめとした神女や島人に課されている精進は三日前(数えなので前々日)から一日目の朝拝みまでになっており(後述)、初穂祭では精進と朝拝みが一組になる祭りであり、夕拝みが島人に直接かわからない祭りであることを示している。これは朝拝み(ならびに精進)と夕拝みが異質であることを意味しており、朝拝み(ならびに精進)が島の祭祀、夕拝みが王府の祭祀であることを浮き彫りにしている。

**完結している朝拝み(精進を含む)** また、島の祭祀は一日目の朝拝み(ならびに精進)だけで完結している(後述)。もし従来のように久高島の麦の穀物儀礼全体が島だけの祭祀だとすると、一・二日目の夕拝みの存在意義がなくなってしまう。すなわち、島の祭りの論理が一

日目の朝拝み(ならびに精進)だけで完結しているのであれば、一・二日目に反復される夕拝みの存在意義が説明できなくなる。この点でも、一日目の朝拝み(ならびに精進)と一・二日目の夕拝みが異質だとわかる。この朝拝み(ならびに精進)と夕拝みの異質性は、祭りの主体(主催者)が前者の場合は島にあり、後者の場合は王府にあることの違いによる、と考えられる。そして、当然そこで幻視されている祭祀世界にも、島レベルと王府(国家)レベルの相違がある、と考えられる。

**二度の夕拝みと王府関係者の渡島** 一・二日目に反復される夕拝みにしても、王府の祭祀だと考えることで疑問は氷解できそうである。今日から見れば、二日目の夕拝みは一日目の夕拝みの単なる反復(むしろさらなる簡略形)で、ほとんど意味を持たない。しかし、二日目の夕拝みは天候の悪化で王府の関係者が一日目の夕拝みまでに久高島に渡海できない場合のために設けられた予備の祭祀だったと考えれば、王府の祭祀としての夕拝みの重要性が浮上してくる。麦の初穂祭を執り行った二月は、二月風廻り(フユフウマヅリ)といってとくに荒れやすい時季であり、久高島への渡海は命がけだった。そして、このことが『羽地仕置』(一六七三年)で国王の久高島行幸を廃止した理由の一つでもあった。

こうしてみると、久高島で執り行われる麦のかつての穀物儀礼は、(一)島の祭祀としての一日目の朝拝み(ならびに精進)と(二)王府の祭祀としての一・二日目の夕拝みの二部構成から成っていたとわかる。**麦の初穂祭が二月から一月に移行した背景** このようにかつては島と王府とが共催していた麦の穀物儀礼のうち、二月に執り行っていた麦の初穂祭を現行の一月に移した事情は何だろうか。

この点について、久高島の穀物起源伝承を記した『遺老説傳』(一七四五年)とその釈文である『久高島由来記』に注目すべき伝承が記されている。その本文は次のとおりである。なお、この条は表3の「(I)麦が成熟した春、王に献上」に相当している。

正月に届るや、麦穂出発すること、甚だ常の麦と異なる。(一)白樽、深く之れを奇異とし、之れを禁城に奉獻す。二月に至り、其の麦已に熟し、恭しく吉日を択び、其の麦を奉獻す。王深く之れを喜び、而して之れを頂戴し、即ち人をして神酒を醸し、以て各処の森嶽を祭らしめ、次に百工に賜ふ。

久高島の始祖・白樽(シラ太郎)が、一月と二月に麦の初穂を国王に献上し、このうち二月の初麦で神酒を醸させ、各地の御嶽で祭らせ、遍く人民に麦を与えたという。この伝承の力点は、王府の二月の麦の初穂祭の起源が久高島にあると説くことにある。

しかし、一月と二月に二回にわたって麦の初穂を国王に献上している点、記述がいささか曖昧である。この麦の初穂を献上した月の揺れには、次のような久高島の麦の畑作暦がかかわっている。すなわち、久高島では麦の青い初穂が一月ごろに出ており(後述)、それで時季的にこの祭りの執行を一月にするのが適当だ、と司祭者が判断したのではなからうか。

しかしそれにしても、王府が健在な時代に王府の定めた祭日を変更できるのは王府以外にないので、王府の文献にその祭日を変更した記載がない以上、この祭日の変更は王府の瓦解(一八七九年)以降に久高島の島人が行った、としか推定できないだろう。そして、王府の神権的な權威は未だに島々に影響を及ぼしているもので、この祭日を変更したのは麦の初穂祭が王府の祭祀でもあったことをほぼ完全に忘れ去るに至った、かなり後世のことだろう。

もし右のとおりだとすると、祭日の変更を決断したのは二日間にわたって事実上この穀物儀礼を司祭した島の最高神女・ノロだろう。すなわち、かつて王府の論理によって二月に定めた祭日を島の論理によって一月に変更した、と考えられる。

**麦の穀物儀礼に準じる粟の穀物儀礼** 王府の編纂した文書(『琉球國中山世鑑』・『中山世譜』・『琉球國舊記』・『琉球國由来記』など)は、

王府の執り行う穀物儀礼として麦と稲の四つの穀物儀礼を記し、粟の二つの穀物儀礼を記していない。

しかし、表2にあるように、久高島の現行の粟の穀物儀礼は麦の穀物儀礼と共通した祭式を持っている。すなわち、島の現行の粟の穀物儀礼は麦の穀物儀礼に準じていることになる。してみると、粟のかつての穀物儀礼も(一)島の祭祀としての一日目の朝拝み(ならびに精進)と(二)王府の祭祀としての一・二日目の夕拝みの二部構成から成っていたことになる。

しかしそれにしても、王府の編纂した文書が王府の粟の穀物儀礼を記載していないのは、なぜだろうか。それは、王府が粟よりも麦に格別な重要性を認めていたからである(後述)。

**司祭者** 島では一日目の「朝拝み」(ならびに精進)の司祭者が外間ノロ、一日目の「夕拝み」の司祭者が久高ノロ、二日目の「夕拝み」の司祭者が根神だ、と説明する。

しかし、現行では三つの拝みを両ノロが司祭している。島の説明は穀物儀礼が島だけの祭祀だととらえ、三つの拝みを国神の中心的神女の両ノロと根神の三人が分担して司祭する、と説いたにすぎないようである。しかしまた、以上のようにかつて朝拝み(ならびに精進)が島の祭祀であり、夕拝みが王府の祭祀だとすると、一日目の朝拝み(ならびに精進)の司祭者がノロ、一・二日目の夕拝みの司祭者が国王あるいは聞得大君だった、ということになる。

**廃絶しがたい祭り** (1)麦と粟の栽培を一九六五年ごろに止めて麦・粟を食べることもなくなっているのに(後述)、麦と粟の穀物儀礼が執り行われ、また(2)王府の関係者の渡島がなくなっても、夕拝みのうち島関係の次第(儀礼)が執り行われ、さらには(3)王府の予備の二日目の夕拝みまで律儀に執り行われるのは、なぜだろうか。それは、祭りが容易に廃絶できないものであり、恣意的な改変や廃絶が崇りを招き

かねない、と考えているからだろう。

しかしそれでもさすがに、存在意義がはっきりしない儀礼は自然と衰弱せざるをえない状況にある。

### 3 本論のねらい

**本論のねらい** 以上のように、王府が瓦解して優に一世紀以上経過し、現行の麦と粟の穀物儀礼のうち、王府関係の祭祀(夕拝み)がとくに衰弱し、これに誤解も加わっている。久高島の穀物儀礼の真の姿はベールに包まれている、といわざるをえない。

本論は、このベールを極力取り去って、麦と粟の穀物儀礼の真の姿を明らかにする。ただし、範囲が広すぎるので初穂祭の「朝拝み」に限定して述べる。

まず、久高島の麦と粟の畑作暦と食法について述べる。

次いで、久高島と王府の穀物起源伝承(語り)のモチーフを一覧にし、その梗概を述べる。

次いで、現行の麦と粟の初穂祭の次第(儀礼)を記述し、構造を整理する。

そして、かつての麦と粟の初穂祭の各次第(儀礼)が、(一)島の祭祀(朝拝みと精進およびフカラク)と(二)王府の祭祀(夕拝み)から構成されていることを、(1)初穂祭に付随する精進の期間、(2)朝拝み(精進を含む)と夕拝みによって神衣裳・祭具が相違すること、(3)儀礼と穀物起源伝承(語り)の対応関係などを視座にして明らかにする。とくに(3)儀礼と穀物起源伝承(語り)の対応関係を指摘することは、穀物儀礼と穀物起源伝承(語り)の相関・補完関係を明らかにすることでもある。そして、この両者の関係を明らかにすることは、これらを支える祭祀組織と相俟って両者の生成・維持される機構を明かすことにもなる。

## 1 麦・粟の畑作暦と食法

### 1 麦の畑作暦と食法

**麦の畑作暦と食法** 野本寛「一九八四、七五―一〇一頁」と比嘉康雄「一九九三b、一一―三三頁」によると、麦の畑作暦と食法は以下のとおりである。

**アカ麦・シナ麦** 麦を食糧として栽培していたのは一九六五年ごろ(昭和四〇年代)までで、現在は穀物儀礼用に西銘豊吉氏がわずかに大麦の一種である裸麦六条種を作っているだけである。裸麦六条種は、島のことばでアカ麦・シナ麦と呼ばれ、島の麦の中心種として長く作り継がれた品種だという。西銘氏は赤人ミーという神役を務めている。赤人ミーはシマリ姫とともに大里家の始祖で、島の穀物起源伝承(語り)で穀物や植物の種物をはじめに手にしたと伝えられ、この神人は穀物儀礼ではいつも重要な役割を果たしている。こうしてみると、西銘氏は古来のアカ麦・シナ麦を守り継がなければならない立場にあったとわかる。

**麦の種下ろし** 麦の種下ろし(初種とも)は、一九三〇年ごろ(昭和初年)まで撒播(バラ蒔き)で、それ以後に畝蒔きになった。この麦の種下ろしは、九月上旬の戌(い)の日の午前中に行う。

かつては、まず大里家、久高根人家、久高ノロ殿内、外間根屋(外間根人家)、外間ノロ殿内の五軒が種下ろしをした。大里家では、ハタス(ハタス原とも)に行き、その拝所に種下ろしの報告と豊作祈願をしてから初穂を下ろす。ハタスは、赤人ミーが入手した穀物の種物をはじめに植えた穀物起源伝承で伝える、聖なる畑である。両ノロ家と両根人家では、ノロ地と根人地に行き、縁起のいいといわれる巳年生まれ(トビシイ)の男(歳直り)を頼んで、村頭の立ち会いのもとで初穂を

下ろす。

これら五軒の種下ろしの後に、その他の一般家庭が自分たちの畑の一面に初穂を下ろす。この時、種物が漂流してきたと伝える東方のニライカナイに向いて、「フタビノムジャー、デキウゴフーシメタボーレ」(この度の麦は、出来よくさせて賜れ)と唱えた。実際の種下ろしは、その後、最初に雨が降ってから行つた。また、戸主の年日に種を下ろすという禁忌があったともいう。

また、かつてニラー大主(ニライカナイの主神)を祭る神女(同じくニラー大主という)が、現在学校のある拝所に麦の粉を供え、麦の拝々と称してニライカナイのニラー大主を拝んでいたという。

種下ろしの日は「種落とし遊び」と称し、午後は仕事を休むのが本来だったという。

**除草** 一月に一度除草する。

**麦の初穂祭** 一月になると青い穂が出る。この青い初穂の成育を願って、一月の中の壬から二日間、初穂祭を行う。

かつては二月の中の壬から二日間の祭りであり、国王(あるいはその代理人)や間得大君などが久高島に行幸して、この祭りに参列していた。

前述したように、かつて二月に執り行っていた麦の初穂祭を一月に移した背景は、島では一月ごろに青い穂を出したのでこの祭りは一月に執行するのが適当だ、という判断を司祭者のノロが下した、と考えられる。

この青い初穂を種と考え、そして種はすなわち男だと観念し(沖縄では男性自身を種という)、この麦の初穂祭を男の祭りとし、男の健康祈願もする。

**精進** また、この時季は麦の結実前の不安定な状態にあるので、厳しい精進・潔斎・物忌みが伴う。それで前述したように、この祭りは

精進祭りともいう。

**収穫** 三月に収穫する。収穫は根刈りで、小束にして乾かす。脱粒した後、よく乾かして壺に貯蔵した。

**麦の収穫祭** 三月の中の壬から二日間、収穫祭を行う。

麦の結実を女性の出産と考え、この収穫祭を女の祭りとし、女の健康祈願もする。これは、麦の初穂祭を男の祭りとすることと対になっている。この対になる穀物儀礼(初穂祭と収穫祭)は男女による双分的世界観を基盤にしており、穀物の結実を健康な男女の性の営み(生殖行為)による豊饒な結果とみている、と考えられる。

**麦の食法** 麦の食法に二つある。その一は粉食である。麦粉を粥状に煮たものを麦アンデーと称し、これが長く島の常食の中心だった。それで、麦の穀物儀礼の神饌は粉食になっている。麦の初穂祭の神饌はマブツチで、その古態は麦粉を粥状にしたものである。また、麦の収穫祭の神饌の三月初はンバイ(ターチメとも)で、その古態は新麦を炒って粉にして湯冷ましを入れて臼で搗き固めたものである。この他に、神饌の神酒にも麦粉を加え、甘藷に麦粉を交ぜたウムニもある。その二は精白した粒食で、麦飯(チチメーという)にして食べる。

## 2 粟の畑作暦と食法

**粟の畑作暦と食法** 野本寛一「一九八四、七五―一〇一頁」によると、粟の畑作暦と食法は以下のとおりである。

**粟の種下ろし** かつて粟の種下ろしの儀礼があり、壬の男がノロ地で初穂を下ろし、その日(いつか定かでない)は働かなかったという。この伝承から、野本氏はハタスでも一二月に粟の種下ろしの儀礼があったろう、と推定している。

**移植** 粟は一、二月の雨の降った後に移植した。収穫作業を展望して、一番二番三番四番と、一週間から一〇日おきに移植した。

**除草** 三、四月に除草する。

**浜シীগ** 三月二十九日に浜シীগをし、多くの種類の畑作に害をなす虫を海に流し去る虫払いをする。

**粟の初穂祭** 五月になると初穂が出る。麦の初穂祭と同じく、粟の初穂祭を男の祭りとし、粟の初穂の成育と男の健康を願って、五月の壬から二日間、初穂祭を行う。

**精進** また、この時季は粟の結実前の不安定な状態にあるので、麦の初穂祭と同じく厳しい精進・潔斎・物忌みが伴い、それで精進祭りともいう。

**収穫** 五、六月に収穫する。収穫は穂刈りで、束ねて乾かす。脱粒、

脱穀は堅臼と堅杵でした。

**粟の収穫祭** 六月の中の壬から二日間、収穫祭を行う。麦の収穫祭と同じく、粟の結実を女性の出産と考え、この収穫祭を女の祭りとし、女の健康祈願もする。

**粟の食法** 粟飯として米や黍と交ぜて食べる場合が多かった。粟の収穫祭の神饌の「粟ンバイ」(日常は粟チチメーという)は、サカ粟という梗種の粟を沸騰させた湯に入れて作った。また、かつては糯粟5・黍5の比率で餅を搗いてこの祭りの神饌にしたという。

### 三 穀物起源伝承

#### 1 久高島と王府の穀物起源伝承のモチーフ一覧

**久高島と王府の穀物起源伝承のモチーフ一覧** この久高島と王府の穀物起源伝承(語り)をモチーフによって一覧にすると、表3になる。

表3 久高島と王府の穀物起源伝承のモチーフ一覧表

A	モチーフ	久高島		の伝承		首里王府の伝承
		現代の口頭伝承	近世の書承	近世の書承	近世の書承	
種物を得た者	伝承者・出典	西銘豊吉	琉球國由來記(2)	琉球國舊記(2)	琉球國舊記(3)	遺老説傳(久高島由來記)
		西銘シズ	琉球國由來記(4)	琉球國舊記(2)	琉球國舊記(3)	中山世鑑
		安泉ナヘ	琉球國舊記(2)	琉球國舊記(2)	琉球國舊記(3)	中山世譜
		シラ太郎・枇加那志	琉球國由來記(2)	琉球國舊記(2)	琉球國舊記(3)	中山世譜
		赤人ミイ・シアリ庇	琉球國由來記(2)	琉球國舊記(2)	琉球國舊記(3)	中山世譜
		赤人ミイ・シアリ庇	琉球國由來記(4)	琉球國舊記(2)	琉球國舊記(3)	中山世譜
		安泉ナヘ	琉球國舊記(2)	琉球國舊記(2)	琉球國舊記(3)	中山世譜
		シラ太郎・枇加那志	琉球國舊記(2)	琉球國舊記(2)	琉球國舊記(3)	中山世譜
×	中山世譜	阿摩美久	中山世鑑	中山世鑑	中山世鑑	中山世譜
		×	×	×	×	×

I	H	G	F		E		D	C	B
			穀物の植物を 蒔いた場所	稲以外の場合 (久高島)	植物の種類	穀物の種類			
久高島のイザイホーに稲藁が くるはじまり	久高島の穀物儀礼(麦の初穂 祭など)のはじまり	土石と植物による久高島の御 嶽のはじまり 神の出現	容器のその後	稲の場合 (久高島外)	アデカ	裸麦・粟・ 小豆・稲	精進(禊)の状況	植物の入っていた容器	植物を得た場所
		×	ハタスに埋める	玉城の百名	ス	久高島のハタ	ヤゲル井で 禊・白衣	瓢箪	伊敷浜
	初穂祭でアテ カと瓢箪を、 収穫祭で蒲葵 の葉を使う	×	ハタスに埋める	玉城の百名 (ミントウ家)	ス	久高島のハタ		瓢箪	伊敷浜
イザイホーに百 名のミントウ家 から稲藁がくる		×		玉城の百名の 久高田御穂田		七種類 (稲を含む)			伊敷浜
	久高島の二月 の麦の初穂祭 のはじまり	×	土中に埋める。 掘った人が死ぬ		久高島の所々	檳榔・アザカ・ シキヨ	沐浴潔斎・ 白衣	白壺	伊敷泊
		×	土中に埋める。 掘った人が死ぬ		久高島の所々	コバ・アザカ・ シキヨ	行水潔身・ 白衣	白壺	伊敷泊
		×	土中に埋める。 掘った人が死ぬ		久高島の各所	檳榔・阿佐嘉・ 志幾與	斎戒沐浴・ 白衣	白壺	伊敷泊
		×	土中に埋める。 掘った人が死ぬ		久高島の地を 選んで	胡把・阿佐嘉・ 志幾與	清水・潔身・ 白衣	白壺	伊敷泊
		×			久高島の占問	種・豆・種	ヤゲル井で沐 浴・潔衣	白壺	伊敷泊
×	×	土石と植物に よる琉球の御 嶽のはじまり 神の出現	×	知念大川・玉 城のヲケミヅ	久高島	草木	×	×	天城
×	×		×	知念・玉城に 自生	久高島に自生	稲	×	×	麦・粟・黍は 久高島に自生、 稲は知念・玉 城に自生



J					I				
i 久高島行幸・魚献上など	e 黄金の瓜種	b 伊敷浜	a 思金松兼	黄金の瓜種	二月の久高島行幸の改訂	四月の玉城行幸のはじまり	二月の久高島行幸のはじまり	琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり	麦が成熟した春、王に献上
				×		×			
				×		×			
				×		×			
				×		×			
				×		×	隔年に久高島行幸	二月の麦の初穂祭のはじまり	麦が成熟した春、王に献上
				×	当職に変更	×	隔年に当職御使	二月の麦の初穂祭のはじまり	麦が成熟した春、王に献上
				×		×	隔年に久高島行幸	二月の麦の初穂祭のはじまり	麦が成熟した春、王に献上
				×		×	隔年に久高島行幸	二月の麦の初穂祭のはじまり	麦が成熟した春、王に献上
i 隔年に久高島行幸・魚献上など	e 黄金の瓜種	b 伊敷浜	a 思金松兼	黄金の瓜種		×	隔年に久高島行幸・魚献上など	麦の神酒を供えて琉球中の御嶽で祭る	正月と二月に王に献上
				×	使者による代祭	玉城行幸	久高島行幸	琉球の穀物儀礼のはじまり	×
				×		玉城行幸	久高島行幸	琉球の穀物儀礼のはじまり	×

※ ×は伝承がないことを示す。無印は伝承がないけれども、伝承があっても不自然でないことを示す。また「A種物を得た者」の( )は助言者を示し、( )は助言者でないことを示す。

## 2 久高島の穀物起源伝承の梗概

**久高島の穀物起源伝承の梗概** まず、久高島に伝わる(またかつて伝わっていた)穀物起源伝承(語り)を見る。若干の異伝があるものの、その梗概はおおよそ次のとおりである。

なお、梗概は現代の口頭伝承を優先し、近世の書承伝承を従にして

述べる。また、A・Bやa・bなどは、表3に付した記号と対応している。以下の引用に付すA・Bやa・bなども、同じである。

(A) 赤人<sup>アカヒト</sup>ミ<sup>ミ</sup>・シマリ<sup>シマリ</sup>毗<sup>ヒ</sup>夫妻<sup>フウサマ</sup>(シラ太郎<sup>シラタロウ</sup>・毗加那志夫妻<sup>ヒカナシフウサマ</sup>とも、アナゴ子<sup>アナゴシ</sup>・アナゴノ姥<sup>アナゴノババ</sup>夫妻とも)がいた。

(A) 夫妻(近世の書承伝承ではアナゴ子、あるいはシラ太郎・毗加那志夫妻)が東海岸の(B)伊敷<sup>イシキ</sup>浜<sup>ハマ</sup>(伊敷泊<sup>イシキボ</sup>)にいと、(C)瓢箪<sup>ヒョウタン</sup>

(白壺とも)が寄って来た。

夫妻が(近世の書承伝承ではアナゴノ姥の助言によってアナゴノ子が、あるいは妣加那志が)(D)ヤグル井(近世の書承伝承ではヤグル井を伝えたり、井戸名を伝えなかつたりする)で精進(禊)し、白衣を着てこれを手にし、その中にあつた穀物と植物の種物を得た。

(E)その穀物の種物とは麦、粟、黍、豆、稲などであり、植物の種物とは檳榔(蒲葵)、アザカ(アテカ、アデカ、アラカ、アダカとも)、シキヨ(薄・萱)である。

これらの穀物の種物のうち、(F)稲を除いた種物を久高島のハタス(ハタス原、古間口とも)に蒔き、そこで増やしてからシマ人(村落共同体の構成員)に分け与えた。(F)稲は玉城の百名に蒔いた。百名は久高島の始祖であるシラ太郎・妣加那志夫妻(兄妹でもある)の出自地である。

(G)この瓢箪(白壺とも)をハタスに埋めた。白壺を掘り出そうとした人が死んだ。

(H)植物の種物(蒲葵、アザカ、シキヨ)が繁茂して、久高島の御嶽のはじまりになった。

(H)すると、神(君真物)が出現し、託遊(神遊)がはじまった。

(I)穀物のうち麦に関しては麦の初穂祭が一月(二月とも)に始まった。また、一月(二月とも)の麦の初穂祭と五月の粟の初穂祭の朝拝みでは、アザカが新穀で作った神饌を打ち払う祭具として使われ、瓢箪も新穀を詰め込む祭具として使われる。また、三月の麦の収穫祭と六月の粟の収穫祭の嶽廻りでは、蒲葵御嶽で蒲葵の葉が新穀で作った神饌を盛り付ける祭具として使われる。

また、(I)稲を送られた百名のミントウン家からイザイホーのアリクヤー(綱)の料となる稲藁が久高島に送られてくる。

(I)種物を蒔いて食物にし、そのうちとくに二月に成熟した麦を

王府に献上し、国王の喜ぶところとなった。

(I)これで神酒を作つて琉球中の御嶽に供え、琉球の穀物儀礼をした。

それで、(I)国王は二月の麦の初穂祭を執り行うために隔年に久高島に行幸するようになった。

(I)この久高島行幸はやがて当職(代理人)に変更された。

(J)近世の『遺老説傳』と『久高島由来記』は、これに続いて黄金の瓜種の説話を記している。

白樽(シラ太郎)は一男二女を生んだ。長男は外間根人になり、長女は祝女、次女の思樽は巫女になった。思樽は後に首里城の巫女になり、国王の寵愛を受けて懐妊する。しかし、過つて放屁したのを他の夫人たちから嘲笑され、久高島に帰った。そして、月満ちて男子を生み、思金松兼と名付けた。

(a)思金松兼は八歳にして王子であることを知り、入朝しようとして伊敷泊で祈った。七日目にして(e)黄金の瓜種が寄り着いた。彼はこれを献上品にして入朝した。その時の口上は瓜の豊作を訴えるものだった。これを機に父子は名乗りを上げ、彼はやがて国王になった。

(i)それで、国王が隔年に久高島行幸をし、外間根人と祝女が国王に魚などを献上するようになった。

### 3 王府の穀物起源伝承の梗概

**王府の穀物起源伝承の梗概** 次に、王府の伝えた穀物起源伝承(語り)を見る。

王府の穀物起源伝承の代表は『琉球國中山世鑑』の伝承である。その梗概はおよそ次のとおりである。

天城に阿摩美久<sup>アマミキ</sup>という神がおり、天帝から土石と(E)草木を貰って琉球島(沖縄本島とその離島)を作り、(H)そこに御嶽も作った。作られた御嶽は山原の安須森<sup>アスモ</sup>や久高島の蒲葵<sup>ハグイ</sup>御嶽などで、琉球の御嶽のはじまりになった。

阿摩美久は天帝から天帝の御子の男女(兄妹)を貰い受け、人のはじめになった。そして、長男は国王、次男は諸侯、三男は百姓、長女は君々、次女は祝祝<sup>ノロノロ</sup>のはじめになった。

(H) キミマモンなどの神々が、定期的に出現するようになった。

(A) 阿摩美久は(B) 天から(E) 麦(麦)・粟・菽・黍・稻(五穀)の種物を貰い、(F) 麦(麦)・粟・菽・黍を久高島に植え、稻を知念大川に植え、後に玉城ヲケミゾ<sup>ウヤシム</sup>(受水)に植えた。

(I) 麦(麦)は春に、稲は夏に実ったので、春夏に四度の祭り(麦と稲の穀物儀礼)をした。これが琉球の穀物儀礼のはじまりである。

そして、(I) 国王は二月に久高島行幸、四月に知念・玉城行幸をした。これが、久高島行幸と知念・玉城行幸のはじまりである。

このうち、(I) 久高島行幸はやがて使者(代理人)に変更された。

### 四 初穂祭の次第と

#### 穀物起源伝承の対応一覧

**久高島の穀物儀礼の調査報告** 久高島の初穂祭と収穫祭の調査報告

と論考として一九七七年の調査を基にした比嘉康雄「一九九三b」、三(五三頁)、麦の初穂祭の調査報告と論考として一九八五年と一九八八年の調査を基にした高橋六二「一九九〇a」、高橋「一九九一b」があり、この他に筆者も一九八〇～一九八四年に調査している。また、久高島における王府の麦の初穂祭の論考として高橋「一九九〇c」がある。なお、琉球の諸間切の麦の初穂祭についての論考として、高橋「一九九一」があり、参考になる。

**初穂祭の次第と穀物起源伝承の対応一覧** 比嘉「一九九三b」、高橋

「一九九〇a」、高橋「一九九一b」ならびに筆者の調査を基にして、現行の初穂祭の次第(儀礼)をまとめると、表4のようになる。また、この次第のほとんどは久高島と王府の穀物起源伝承に対応しているの、その対応する条を最下段に示す。一見してわかるように、朝拝み(精進を含む)とフカラク(島の祭祀)と島の穀物起源伝承の対応が多いのに対して、夕拝み(王府の祭祀)と王府の穀物起源伝承の対応は少ない。

以下、この一覧表の順に見ていく。

表4 初穂祭の次第と穀物起源伝承の対応一覧表

月日	時刻	次	第	場	所	歌謡	備	考
前々日		神の御前のハナ		年上の村頭の家、 三アムトウ				
量り前		量り前		組の親の家				
(前日)		量り前		組の親の家				
		マブツ作り		組の親の家				
		樽真神酒作り		神酒当たりの家				
		フカラクイ		向ノ口殿内				
量り前		穂花拜		一般神女の家				
		タムトウ祝いとウンサクへの昇任		新タムトウの家		粟の初穂祭のみ		
		祭場の準備						
		屏風を張る		外間殿・御殿庭		赤綾屏風と白い屏風を張るのは外間殿のみ		
		タムトウ(神座)の準備						《E得た植物の種類の種類》・《H植物による久高島の御嶽のはじまり》
		神饌の準備						《E得た植物の種類の種類》・《H植物による久高島の御嶽のはじまり》
		瓢箪ガーキの準備						《C植物の入っていた容器》
		三穂の準備						《E得た穀物の種類の種類》・《F穀物の種類を蒔いた場所》
早朝		精進		蒲葵御嶽				《C植物の入っていた容器》
		神の御前の拝		蒲葵御嶽・拝み小				《E得た植物の種類の種類》・《H植物による久高島の御嶽のはじまり》・《I久高島の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり》
		アザカの採取						《D精進(稷)の状況》
		精進		ヤグル井		ノ口の神衣裳は精進姿		《A種物を得た者》・《F穀物の種類を蒔いた場所》
		朝拝み(朝祭りとも)				赤人ミイは神酒桶の傍らにいる		《A種物を得た者》・《C植物の入っていた容器》・《D精進(稷)の状況》・《E得た穀物の種類》・《I久高島の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり》
		i 持ち前						《E得た穀物の種類の種類》・《I久高島の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり》
		ii アザカでマブツを扇ぎ、男たちが食べる						《E得た穀物の種類の種類》・《I久高島の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり》
		iii 女たちが瓢箪ガーキの汁を飲む		外間殿				《C植物の入っていた容器》・《E得た穀物の種類の種類》

[illegible]

二 日 目			
夕			
夕拝み(夕祭りとも)			
viウンサクの神酒上げ	外間殿	表5ウンサクの神酒上げの次第 参照	《A種物を得た者》・《E得た穀物の種物の種類》・《F種物を蒔いた場所》・《I琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり》・《I二月の久高島行幸のはじまり》
●(国王などの神酒上げ)			
viii祭場の移動	道中		
viウンサクの神酒上げ	御殿庭	表5ウンサクの神酒上げの次第 参照	《A種物を得た者》・《E得た穀物の種物の種類》・《F種物を蒔いた場所》・《I琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり》・《I二月の久高島行幸のはじまり》
●(国王などの神酒上げ)			
祭場の後片付け	外間殿 御殿庭	赤綾屏風と白い屏風を外すのは外間殿のみ	

※ ①わかる範囲でかつての次第を復原して記した。ただし、誤伝と考えられる一日目の夕拝みの後のフカラクは、現行どおりに記した。

②●は筆者の想定である。

③朝拝みと夕拝みに付したi・iiなどの記号は対応しており、「島と王府の穀物起源伝承」に付したA・Jーなどの記号も、「表3 久高島と王府の穀物起源伝承のモチーフ「覧表」の記号と対応している。

④島と王府の穀物起源伝承のモチーフを区別するために、島の伝承のモチーフに《》を付した。

## 五 神の御前のハナ(前々日)

**神の御前のハナ** かつては、三日ウイラー、四日ウイラーとい

(四日ウイラーは三日ウイラーの対語)、三日前(数えなので一日目の前々日)に、各家が年上の村頭の家(シヤムラガシラ)に少々の穀物(麦の初穂祭では麦、粟の初穂祭では粟)と御香(線香)二平を持参する。これを神の御前のハナという。ハナとは神饌の穀物(麦・粟)を指す。村頭がこれを三アムトウ(両ノロ殿内、外間殿)に捧げる。三アムトウの神女(両ノロ、根神)がこれらを火の神、大庫裡(一番座の東南の隅の聖域)、床の神に供えて拝む。それから根神を除くノロたちが蒲葵御嶽に行つて拝んだ。この祈願の日をも神の御前のハナという。

現行では、祭りの前日に各家が年上の村頭の家(シヤムラガシラ)に少々の米と御香二平を持参する。村頭がこれを三アムトウに捧げると、三アムトウの神女がこれらを火の神、大庫裡、床の神に供えて拝む。根神を除くノロたちの蒲葵御嶽での拝みは省略している。

この神の御前のハナは大体祭りにいつも付随するもので、穀物儀礼にだけ付随するものでない。それで、この神の御前のハナでは慣例どおり、まず三アムトウの神女(両ノロ、根神)に神饌を献上している。しかし、これに次いで根神を除くノロたちが蒲葵御嶽に行つて拝んでいるので、この祭りの司祭者が両ノロだとわかる。

## 六 量り前(前日)

## 1 量り前

**量り前** かつては一日目の前日、一<sup>オホ</sup>地当たりいくらと定めて、各地主がマブッチ(初穂祭の神饌)、あるいはンバイ(収穫祭の神饌)と樽<sup>ケル</sup>真神酒の料とする穀物(麦の穀物儀礼では麦、粟の穀物儀礼では粟)・芋(甘藷)を組の親の家に持参し、組の親がこれを斛で量って受け取っていた。現行では、麦の穀物儀礼も粟の穀物儀礼も供出する料は米で統一されている。これを量り前という。メーは前(割り当ての義)で、割り当てられた一定の祭料を量るので、この祭料の徴収を量り前と<sup>ハカイ</sup>いつた、と考えられる。そして、この日をも広く量り前<sup>ハカイ</sup>といっている。「持ち前<sup>チ</sup>」(祝詞)は、この量り前のことを三アムトウ・一般家庭から祭料を集め、マブッチを供える、と述べている(後述)。

**組の親** 島には原則として一五<sup>ゴ</sup>の地を一組にした一〇組があり、それぞれに組の親<sup>クミノオヤ</sup>を置いている。組の親の任期は一年で、一月の麦の初穂祭からはじまる。組の親の持ち回りのし方は、組を左廻り(時計廻り)する。その仕事内容は、組の地主が持参する祭料を受け取り、(1)初穂祭ではマブッチ(お粥)に、収穫祭ではンバイ(お握り)に調理して各祭場に供え、また(2)神酒<sup>カミヰ</sup>当<sup>タ</sup>に祭料を渡して樽真神酒を作ってもらうことである。

**ノロの司祭する五つの祭り** 地を基盤にした組が祭料を供出する祭りは、麦と粟の穀物儀礼とフバワクの五つである。いずれもノロが直接司祭し、ノロはこれ以外の祭りを司祭していない。

**マブッチ・ンバイ作り** (1)組の親はかつて麦・粟の初穂祭では麦・粟のマブッチ(お粥)を、麦・粟の収穫祭では麦・粟のンバイ(お握

り)を作っていた。現行では麦・粟の初穂祭で米のマブッチ、麦・粟の収穫祭で米のンバイに統一されている。

**マブッチ・ンバイを供出する組の割り当て** (1)初穂祭のマブッチと収穫祭のンバイは、朝拝<sup>アサガハ</sup>みにだけ両祭場(外間殿、御殿庭)に供えられる。そのマブッチとンバイを供出する組の割り当ては、表5のとおりである。

表5 マブッチとンバイを供出する組の親の割り当て表

(比嘉康雄、1993b、11頁を基に作成)

一日目の朝拝み		月日・儀礼	祭場
		御殿庭	外間殿
組	イビンミー組	ナカタナカ組	グスク組
	メーンシム組	ハーヌイ組	トウキヤー組
組	ヤブヤー組	イキン組	ウブシ組
		スルバン組	

**樽真神酒作り** (2)組の親は神酒<sup>カミヰ</sup>当<sup>タ</sup>に樽真神酒の料(かつては麦の穀物儀礼には麦と芋、粟の穀物儀礼には粟と芋。現行ではどの穀物儀礼にも米だけ)を渡す。神酒当<sup>タ</sup>はこれを受け取り、樽真神酒を作る。

かつての樽真神酒の作り方は、麦の穀物儀礼では皮を剥いた蒸し芋3対麦ご飯1を木臼で搗き、水を加えた後、漉していた。また、粟の穀物儀礼では麦ご飯が粟ご飯に変わるだけで、その他は同じである。芋は味付けに用いるものである。本来は芋を用いないで穀物だけで作る

ものだという。現行では麦の穀物儀礼も粟の穀物儀礼も、米だけで作る樽真神酒に統一されている。

なおかつては、久高根人の家でも樽真神酒を作っていた。現在は、久高根人の家の分はイキン組とウブシ組が代わりに作っている。

**神酒当たり** 神酒当たりは、麦と粟の穀物儀礼とフバワクの五つの祭りのうち、一つの祭りの神酒作りにだけ従事し、割り当てられた日に祭場に持参する。その持ち回りのし方は、組を左廻り(時計廻り)する。

**樽真神酒を供出する神酒当たりの割り当て** 樽真神酒は、穀物儀礼の二日間のすべての祭りに供えられる。その樽真神酒を供出する組の割り当ては、表6のとおりである。

各組の親がこれらの神酒を二つの祭場に運び、村頭がこれを受け付ける。

表6 樽真神酒を供出する神酒当たりの割り当て表

(比嘉康雄、1993b、11頁を基に作成)

二 日 目		一 日 目				月 日
夕 拝 み		夕 拝 み		朝 拝 み		儀 礼
御 殿 庭	外 間 殿	御 殿 庭	外 間 殿	御 殿 庭	外 間 殿	祭 場
ヤブヤー組	ハーヌイ組	メーンシム組	ナカタナカ組	イビンミー組	スルバン組	組
				ウブシ組	イキン組	
				久高根人 (今はイキン組とウブシ組から分ける)		
					トウキヤー組	
					グスク組	

## 2 フカラク魚

**フカラク魚** 漁の男神人である両ソールイガナシーが海人から魚を譲り受け、兄(年上)のソールイガナシーは外間ノロに、弟(年下)のソールイガナシーは久高ノロに、それぞれ魚を届ける。その魚を村頭が料理し、朝拝みと夕拝みの後に執り行われるフカラクに提供する。それで、この魚をフカラク魚という。フカラクの語義は不詳である。

以上、フカラク魚が両ノロにだけ献上されて根神に献上されていないことから、この初穂祭の司祭者がノロだとわかる。

**大漁と渡海安全の祈願** このフカラク魚の献上は、大漁と渡海安全の祈願をノロに依頼していることを表しているよう。ニライカナイから穀物の種物が漂着した穀物起源伝承に基づいた初穂祭にちなみ、同じくニライカナイからの寄り物である魚も島にたくさん寄せ、渡海安全も保証してほしい、と司祭者のノロにフカラク魚を献上して依頼している、と考えられる。

この男たちの祈願に込めて、司祭者のノロは「持ち前」(唱え言・祝詞)で大漁と渡海安全の祈願をし、さらにフカラクとして儀礼化している、と考えられる(後述)。

## 3 穂花拝

**穂花拝** 祭日の前日に、穂花拝が一般神女の家で執り行われる。穂花とは、穀物(麦・粟)の穂花の義、ベーは拝の義である。これは家レベルの祭りで、その家の神女とその家族の繁栄を祈願する。タムトウ以上の神女がいる場合はタムトウが司祭し、タムトウ以下の神女しかいない場合はティンユタ(一門・ヒキの神女、ウクリングワとも)が司祭する。



屋敷の神にフーグインバイ(小さい握り飯)を供えた後、盛米、サルマウユー(神酒の一種)を火の神、戸走り(二番座の東南の聖域)、床の神の順に供え、御香(線香)を焚いて拝む。この時、穂花拝の「持ち前」を唱える。その持ち前として、比嘉「一九九三、三〇九〜三六頁」に一例、高橋「一九九〇a、三七頁」に一例が採録されている。それによると、ティンユタの内間マツク刀自はタムトウ以外の家で次のようなことを述べている。今年の正月のよき日に、新穂花加那志を祭ると述べ、イザイホーで戴いたウプティシジにこの家の主婦(一般神女)の健康と長寿、その家族の健康と繁栄を祈願している。なお、粟の初穂祭の持ち前では詞章の「正月」が「五月」に変わる。

#### 4 タムトウ祝いとウンサクへの昇任 (粟の初穂祭のみ)

**タムトウ祝い** 粟の初穂祭に限ってこの日、新タムトウはタムトウ祝いを新タムトウの自宅でし、これに付随して兄ヤジクがウンサクに昇任する。

畠山「二〇〇六、二七六〜二八八頁」によると、タムトウ祝いはタムトウへの就任式で、ナンチュ(島の一般神女組織の最下位)の成巫式であるイザイホーと並ぶ重要な儀礼である。島の一般神女組織は王府の神の島の一般神女組織でもあり、ナンチュは聞得大君に直属する神女だった。タムトウはこの一般神女組織の長老格で、六〇〜七〇歳までの女性となる。

このタムトウになると、七祭りナナマツリで神酒を献上される。七祭りとは、麦の初穂祭(一月、かつては二月)、麦の収穫祭(三月)、粟の初穂祭(五月)、粟の収穫祭(六月)、大真神酒(七月)、八月祭り(八月)、真神酒小(一〇月)である。タムトウ祝いを終えた新タムトウは、この

七祭りのうち翌日の粟の初穂祭から参列してウンサクの捧げる神酒を受ける。

**ウンサクへの昇任** ウンサクには親ウンサクと弟ウンサクがあり、その職掌はタムトウ以上が参列する七祭りナナマツリで神々や神人たちに神酒上げすることである。ウンサクの名称の由来は、この御酒ウシサケ(神酒のこと)をお酌するところにある。親ウンサクは両ノロと根神に付くウンサクであり、弟ウンサクはその他のウンサクである。ウンサクが兄ヤジクから昇任する日はこのタムトウ祝いの日で、前任者のウンサクがタムトウに昇任したら、その人の数だけ生まれ歳の順にウンサクを補っていく。したがって、五月の粟の初穂祭の前日に自動的にウンサクに昇任し、翌日から神酒上げに従事している。

**王府の重視した麦の穀物儀礼** タムトウへの昇任とウンサクへの昇任が、なぜ粟の初穂祭の前日に行われたのだろうか。これには王府が重視した麦の穀物儀礼がかかわっている、と考えられる。

王府の穀物起源伝承で久高島に蒔いたと伝える麦・粟・菽・黍のうち、王府はとくに麦を重視し、国王が聞得大君などと久高島に行幸し、二月の麦の初穂祭にだけ参列し、司祭していた。その王府関係者にも当然、神酒が献上され、その神酒上げの役は親ウンサクが務めただろう(後述)。

そして、その二月の麦の初穂祭の時、粗相のないように神酒上げに慣れたウンサクが神酒上げをし、そしてこの麦の初穂祭と対になる三月の収穫祭での神酒上げを花道にして、ウンサクからタムトウに昇任した、と考えられる。

以上、タムトウへの昇任とウンサクへの昇任が麦の穀物儀礼の終了後になったのは、王府が粟の穀物儀礼よりも麦の穀物儀礼に格別な重要性を認めたからである。前述したように王府の編纂した文書『琉球國中山世鑑』などに王府が久高島で麦の穀物儀礼だけを執り行っ

ているかのように記すのは、このように麦と粟の扱いに大きな格差があったからである。

## 七 祭場の準備

**祭場の準備** 一日目の早朝に祭場の準備をする。

**屏風を張る** 外間殿の天井に赤綾屏風(布)を張る。これが張られると、門中の祭り、家の祭り、個人の祭りができない。また、外間殿のタムトウ座に白い屏風(布)も張る。

**タムトウ(神座)の準備** ノロと根神の座る根ダムトウ(神座)が村頭の妻によってノロ地の畑から採った薄で作られ、両祭場に用意される。ノロと根神の掟神(御前居とも)の座るシキダムトウも村頭の妻によって薄で作られ、両祭場に用意される。タムトウの座るシキダムトウ(神座)は各タムトウが作り、この日の早朝に持参して自分の席に置いておく。

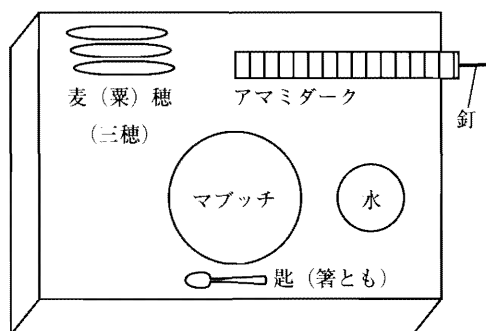
**儀礼と穀物起源伝承の対応** この根ダムトウとシキダムトウ(神座)の料になる薄は、伊敷浜に漂着した瓢箪(白壺とも)に入っていた聖なるシキヨで、植物による久高島の御嶽のはじまりになったという由来とかかわっている。すなわち、儀礼と久高島の穀物起源伝承(E得た植物の種類の種類)・(H植物による久高島の御嶽のはじまり)が対応している。

**神饌の準備** 村頭が村を左廻り(時計廻り)して辻々で「ミキハカラシンソーレー(神酒を量らせて候え、神酒を量らせてください)」とウタイ(辻触れ・お知らせ)をし、これが合図になってマブッチと樽真神酒が両祭場に運ばれる。

マブッチは各組の親によって定められた数の高膳に載せられ、外間殿には七つ、御殿庭には五つ用意される。高膳には他に、釘を通した五節か七節あるアマミダーク(アマミラークとも。学名ダンチク)の幹(ムンヌキすなわち悪魔払いの矢になぞらえている)、水、匙(箸とも)を置いてある。

図1 マブッチの高膳

(比嘉康雄、1993b、16頁より。ただし一部変更)



各組の神酒当りによって作られた樽真神酒は、各組の親によって両祭場に運ばれる。村頭がこれを受け付け、量りながら桶に移し入れる。両祭場にはそれぞれ二つの神酒桶が用意される。一つ目の桶は、柄杓取りと赤人ミのの前に据えられる。そして、この桶から注がれるアシクム(台付きの木椀)も用意される。二つ目の桶は、村頭の前に据えられる。そして、この桶から注がれる木椀とそれを載せる膳も用

意される。

### 瓢箪ガーキの準備

親ウンサクによって両祭場の高膳の前に二個の瓢箪ガーキが用意される。瓢箪ガーキは、ヤグル井の聖水と穀物(麦)の初穂祭では麦、粟の初穂祭では粟)の初穂を入れる祭具である。「持ち前」(祝詞)は、この瓢箪ガーキの準備のことを述べている(後述)。

### 儀礼と穀物起源伝承の対応

この瓢箪ガーキは、穀物起源伝承において穀物と植物の種物が入っていた瓢箪のことだという。すなわち、儀礼と島の穀物起源伝承(種物の入っていた容器)が対応している。

### 三穂の準備

早朝、両ノロ、その掟神、両ノロ付きの親ウンサク、弟ウンサクが紺地を着用して外間殿に来る(ここにも根神が入っておらず、根神が司祭者でないとわかる)。そして、ノロはマブツチの各高膳に、麦の初穂祭では三本の麦の初穂を、粟の初穂祭では三本の粟の初穂を置く。この三本の初穂を三穂という。

この三穂は、現行ではノロがノロ地から前日に採っている。かつては赤人ミイがハタス(ハタス原とも。ニライカナイから漂着した稲を除く穀物の種物をはじめて蒔いたという畑)から、ノロがノロ地から、根人が根人地から、初穂を採ったという。

### 儀礼と穀物起源伝承の対応

このかつての赤人ミイの三穂の採取のし方でも、儀礼と島の穀物起源伝承(E得た穀物の種物の種類)・(F穀物の種物を蒔いた場所)が対応している。

### 「古間口」の読みと語義

こうしてみると、赤人ミイ夫妻(シラ太郎夫妻、アナゴノ子夫妻とも)が瓢箪(白蜜とも)から得た穀物の種物を蒔いたハタスは、別名を「古間口(コマグチ)」ともいう、と考えられる。『遺老説傳』「一九七八、一三〇頁」によると、シラ太郎夫妻が伊敷泊で入手した穀物の種物を「古間口」に蒔いたと伝え、この書の編訳者(嘉手納宗徳)は「古間口」をフルマグチと読んでいる。しかし前述したように、麦と粟の初穂は穂をつけ始める成育状態にあり、それ

をシチュマ、シチマ、シキヨマ、シキユマ、スコマと称していたので、穀物にかかわる神人の赤人ミイ(シラ太郎夫妻、アナゴノ子夫妻とも)が初穂・スコマを採って祭場に供出する所、すなわち「スコマ口」となり、そのスガ脱落して「コマ(古間)口」になった、と考えられる。

## 八 精 進

### 1 神の御前の拝

**神の御前の拝** 外間ノロが外間殿を拝み、両ノロとその掟神、ならびに両ノロ付きの親ウンサクと弟ウンサクの一行は、直ちに蒲葵御嶽に向かう(ここにも根神とその掟神がいないので、根神がこの祭りの司祭者でないとわかる。以下の儀礼でも同じである)。途中の拝み小(中の御嶽)で久高ノロが祈願する。次いで、蒲葵御嶽で外間ノロが祈願する。この祈願はこれから本格的に祭りを執り行うというもので、神の御前の拝という。

### 2 アザカの採取

**アザカの採取** 次いで、両ノロとその掟神、ならびに両ノロ付きの親ウンサクと弟ウンサクの一行は、蒲葵御嶽でアザカ(アダカ・アラカとも。学名リユーキユーアオキ)を採取し、五本の束を二つ、七本の束を二つ作る。このアザカは聖なる葉で、朝拝みにおいてこれで神饌のマブツチを扇いでいる。

なお、この聖なるアザカの葉は、他にイザイホーの三日目にスジ付

け用のスジ(桑団子)を載せる祭具になり、四日目にナンチュたちの両耳に一枚ずつ挿す祭具になっている。

**儀礼と穀物起源伝承の対応** このアザカは島の穀物起源伝承に登場する植物で、穀物の種物とともにニライカナイから漂着し、これが繁殖して御嶽のはじまりになったものである。すなわち、儀礼と島の穀物起源伝承(「E得た植物の種物の種類」・「H植物による久高島の御嶽のはじまり」・「I久高島の穀物儀礼(麦の初穂祭など)」のはじまり)が対応している。

**ニライカナイの選擇** 次いで、各ノロはアザカの束を路上に置いて拝み小を向いて拝む。拝み小はニライカナイを選擇する御嶽なので、ここを通して穀物と植物の原郷であるニライカナイを選擇したのでらう。

### 3 精 進

**精進** 次いで、(1)両ノロとその掟神、ならびに両ノロ付きの親ウンスクと弟ウンスクの一行はヤグル井に移動し、精進(禊)をする。現行では水を撫でつける程度である。かつては水浴をしたという。その様子を「持ち前」(祝詞)は、赤人ミイが管掌するヤグル井でノロ・高級神女が朝早く五回、七回の精進(禊)をしている、と述べている(後述)。

次いで、今婦仁遙拝の香炉とヤグル井を拝む。これは、今婦仁城とヤグル井に初穂祭をする報告祈願だという。

次いで、全員が白い神衣裳に着替える。すなわち、白い胸衣と下袴、白い大衣を着用し、白い細帯を前で蝶結びにする。この白一色の神衣裳は精進(禊)の姿である。以上を精進という。

次いで、ヤグル井の水を桶に汲んで、外間ノロを先頭にして外間殿

に向かう。

**儀礼と穀物起源伝承の対応** このヤグル井での精進は、伊敷浜に寄つて来た穀物と植物の種物の入っている瓢箪(白壺とも)をヤグル井で沐浴し白衣を着て手にしたという島の穀物起源伝承(D精進(禊)の状況)に対応している。

とくに『遺老説傳』(ならびに『久高島由来記』)で、ヤグル井で沐浴して淨衣を着て白壺を手にした者が、シラ太郎の妻(妣加那志)だと記しているのは、注目される。実際の多くの祭祀儀礼では神女が祭祀を司っており、現行のこの穀物儀礼ではノロが司祭している。してみると、伝承上のシラ太郎の妻(妣加那志)と儀礼上のノロの精進姿がダブって見え、そこに儀礼上の新旧が透けて見える。すなわち、ノロが精進姿で穀物儀礼を司祭する以前は、シラ太郎の妻(妣加那志)を祭る神女(あるいは白壺を入手した他の主役たちにも敷衍してシマリ妣、アナゴノ姥を祭る神女)が精進姿で穀物儀礼を司祭していた、と想定される。

**その他の精進** (1)右の精進は中核部の神女の精進(禊)である。この他、さらに広く祭りに参列する神人と全島人に次の四つの精進・物忌みが課されている。

(2)三日精進といって、祭りに参加する神女は祭りの三日前(数えないので前々日)から朝拝みが終了するまで豚肉を食べてはならない(豚肉を食べると汚れるという)。

(3)精進と朝拝みの執行中、生理中の女性は島の南端のエラブ小屋で控える。

(4)精進と朝拝みの執行中、妊婦はジール(産室)になるクチャ(裏座敷)の戸を開けて外に出る。

(5)朝拝みが終わるまで、シマ人(村落共同体の構成員)は畑に行かない。  
(1)・(2)は穀物儀礼に参列する神女の精進、(3)・(4)は女性の血の忌み

(3)は生理中の女性の忌み籠もり、(4)は出産中でないことの表明、(5)は一般のシマ人の精進である。それで前述したように、この祭りを精進祭りともいう。「持ち前」(祝詞)は、(3)・(4)の女性の禁忌を厳守しているとして述べている(後述)。

**朝拝み(精進を含む)は島の祭祀、夕拝みは王府の祭祀** 以上、神女や全島人に課された精進が前々日から一日目の朝拝み終了までになっているので、精進と朝拝みが島人に直接かわる祭りであり、初穂祭では精進と朝拝みが一組になる祭りだとわかる。またこれによって逆に、夕拝みが島人に直接かわらない祭りだともわかる。こうしてみると、朝拝み(精進)と夕拝みが異質であり、朝拝み(精進)が島の祭祀、夕拝みが島以外の祭祀、すなわち王府の祭祀だといえよう。

## 九 朝拝み

### 1 外間殿での朝拝み

**外間殿での朝拝み** 朝拝み(朝祭りとも)は外間殿から始まる。

### 2 準備

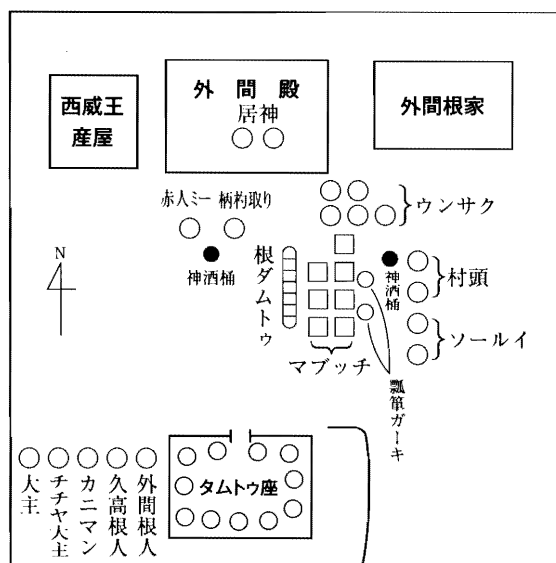
**外間殿の配置** ノロたちが精進に行っている間、村頭が村を左廻り(時計廻り)して辻々で「サーリ。ウヌトウチナイビタン。ウミヤニウンチケーシヤビラ」(サーリ。この時になりました。御庭(祭場)にご招請(ご案内)します)と、ウタイ(お知らせ)をする。

すると、根神、根神の掟神、タムトウ、男神人、居神・村頭、大主

が外間殿に参集し、所定の座に着く。根神、根神の掟神、タムトウは白い大衣、白鉢巻き、ハブイ(トーズルモドキの冠り)を着用し、蒲葵扇を手にして、タムトウ座に座る。両ノロと根神の被るハブイの料のトーズルモドキは、前日に親ウンサクが蒲葵御嶽から採取してある。根神付きの親ウンサクと残りの弟ウンサクが紺地を着用し、控えている。赤人ミ、根人、カニマン、柄杓取り、チチャ大主は白い神衣裳を着用している(以上が男神人)。大主は正装している。

図2 外間殿の祭場

(比嘉、1993b、16頁より。ただし一部変更)



このうち、赤人ミが穀物儀礼に限って柄杓取りとともに神酒桶の傍らに座を占めている。このことは樽真神酒の管理者が柄杓取りと赤人ミであることを示している。なお、村頭の前にも神酒桶があり、

村頭も神酒を注ぐ。

来賓格の居神はいつものように外間殿に座る。

**儀礼と穀物起源伝承の対応** 以上、この儀礼における赤人ミの座は、赤人ミが穀物の種物の入っている瓢箪(白壺とも)を手にしてハタスに蒔き、島人に分け与えたという島の穀物起源伝承(A種物を得た者)へ(F穀物の種物を蒔いた所)に対応している。

**中外間を拝む** 精進(禊)を終えた両ノロはノロ付きの掟神とウンサクを連れて各自のノロ殿内に戻り、火の神、大庫裡、床の神を拝んでから外間殿に行く。そして、両ノロは一旦タムトウ座に座る。外間ノロが中央に座る。

次いで、両ノロは中外間の庭のイビに、麦の初穂祭では麦を、粟の初穂祭では粟を供えて拝む。これはこの家に島の始祖のシラ太郎・疵加那志夫婦がやってきたからとも、この家からかつてノロが出たからともいう。

**瓢箪ガーキの準備** 次いで、外間ノロとその掟神はマブツの前に立って東方を拝み、ヤグル井の聖水を入れた瓢箪ガーキに高膳の三穂をほぐして入れる。

### 3 持ち前

**i 持ち前** 次いで、両ノロとその掟神はアザカの葉の束を抱えてマブツの前に立ち、ニライカナイのある東方を拝む。

次いで、両ノロが「持ち前」(唱え言、祝詞)を唱える。

**比嘉康雄の採録** 次にあげる「持ち前」は、比嘉康雄の採録「一九九

三b、一七二二頁」による。この持ち前の伝承者は、外間ノロの掟神・西銘シズ刀自である。なお、小見出し、A、Bなどの段落区分、

節を示す数字、へ)の共通語訳は筆者が付した。

### ノロたちの精進

- A一 アカツミীগ ファイティメール アカツミীগが 管掌している  
二 ヤグルウカー ヤグル井泉(ヤグル御井で)  
三 サシプターヤ ノロたちは(サシプたちが)  
四 イティソージ 五回の禊(五つの精進を)  
五 ナナソージ 七回の禊(七つの精進を)  
六 アサカワヌ ムムクビラ 早朝(朝井の 百御水撫で)  
六のムムクビラはムムウビラの誤植で、百御水撫での義と考えられる。Aは、赤人ミが管掌しているヤグル井でノロ・高級神女が朝早く丁寧に精進(禊)している、と述べている。

### 祭場の準備

- B七 フカマシーガ 外間根人が(外間子が)  
八 マイルマミヤーガ (守る真庭で)  
九 サシプターヤ ノロたちは(サシプたちが)  
一〇 正月ミードウシヤ 新たまる年に(正月の新年に)  
一一 グレイマブツチ 立派なマブツチ  
一二 ウツシユマツシュ  
一三 ニブイ ハナサク  
一四 タライ ナイリク  
一五 ガンマーティブル 瓢箪の祭具

一〇の正月ミードウシヤは粟の初穂祭では五月ノになる。不詳の語があるものの、Bは外間殿で司祭者のノロが神饌や祭具を整えて祭場の準備ができた、と述べているとわかる。御殿庭では七のフカマシーがクダカシー(久高子、久高根人)になる。

**一段** 以上、ノロたちの精進(A)、祭場の準備(B)は、祭りの準備が整ったことを述べている。これらを一段とする。

## 全体的な繁栄祈願

C 一六 イチメーアル フボージマヤ 久高島は(一枚ある 蒲葵島は)

一七 シマサカイ 島が栄え

一八 クニサカイ 島が栄え(国が栄え)

一九 キンソーチヨーテ たまわり

一六の「一枚ある蒲葵島」は久高島の別名で、神木の蒲葵の葉を一枚浮かべた神の島、神に加護された島という義である。島ではフとクが音相通である。Cは、シマの全体的な繁栄祈願を述べている。

## 豊作祈願

D 二〇 ニーグウイシ

二一 ヌルグウイシ 根神の畑

二二 ハキルブイ 皆の畑

二三 タボーチメール 管掌している(賜りくださる)

二四 ウプサバル 大きい畑(原)

二五 ピユーサバル 小さい畑(原)

二六 ナナムジャヤー 麦(シナ麦)

二七 テイルムジャヤー 麦(照り麦)

二八 サカラチャヤーユランター 芋(粟・芋)

二九 ブルマミ 豆

三〇 デイキガフー 豊作(出来果報)

三一 ウタビミソーチヨーテ たまわりまして

Dは豊作祈願である。この条は、初穂祭の主題を最もよく示している。

## 女たちの精進による祈願

E 三二 ソージウルサ

三三 ソージナマサ (精進は今だ)

三四 ウプクウバラター (精進は今だ)

娘たち

三五 タキウリーター

三六 ヌバタキリウトウチ

三七 ウリルソートウ

三八 テンヌグウトウ

三九 ハミヌグウトウ

四〇 ムヌシリテイ

四一 アインピランクウトウ 世は世に

四二 ユーヤユーニ 従って下さつて

四三 シタガイミソーチヨーテ 神様も

四四 ハミサマン 落ち着かれて

四五 ギイティキジュラサ 拝まれて下さい

不詳の語句があつて正確に文脈を辿りきれない。しかし前述したように、女性の血の忌みにかかわる精進が二点あり、精進と朝拝みの執行中は厳しく禁忌を守っている。Eは、女性の血にかかわる精進を今しながら祈願しているので、神は落ち着いて拝まれよ、と述べているようである。

## 大漁と渡海安全の祈願

F 四七 タティマンヌワカグラヤー 竜宮神は(二頭の馬の立派な

若五郎(漁の神)よ)

四八 ターキビン ターキ干瀬

四九 ユアラビン ユアラ干瀬

五〇 シトウガイエ シトウ魚

五一 マルガヤーラ 大きいシトウ魚

五二 モーシクワラ スク魚も(藻の子も)

五三 シヌミリン ガチユン魚

五四 ピシアリ 干瀬荒れ

五五 トウスバタラ

五六 アシラティ

五七 ススラティ

五八 デイキガフー

五九 ウタビミソーチヨーテ

六〇 リユーグヌウティスクウン

六一 アギヌメームン

六二 ムムウチャーソーティ

六三 ウタビミソーチヨーテ

六四 シジウイ クニウイ

六五 ウタビミソーリ

六六 ハリユシヌフボーリターガ

六七 ニシハイ ハイニン

六八 イギブニン

六九 イリプニン

七〇 ウユイトウティ

七一 ノーサトウティ

〈足に抱き抱き〉  
〈裾に抱き抱き〉

豊漁に〈出来果報に〉

させて下さい

海の幸(竜宮のウティスクウン)

陸の幸

合わせて

たまわり

〈たまわりください〉

幸多い久高人が

〈嘉例良しの蒲葵人たちが〉

北へ行く〈北南 南北〉

出舟

入舟

〈ウユイ(祭具)を手にとつて〉

〈直し(祭具)を手にとつて〉

四七・四八のピンはビシの誤植である。六七のニシハイハイニンは

ニシハイハイニシ(北南南北)が正しく、その語義は東西南北である。

七〇・七一のウユイ・直しは薄の束(祭具)で、これを振ること悪

魔払いをする。六六・七一の渡海安全の祈願は、四・九月のカンジャ

ナシの趣旨と同じである。

不詳の語句があるものの、漁の神・二頭の馬の立派な若五郎に大漁

を祈願し、また渡海安全も祈願しているとわかる。ニライカナイから

穀物と植物の種物が漂着した島の穀物起源伝承に基づく穀物儀礼にちなみ、二人のソールイガナシが両ノ口にフカラク魚を捧げて、ニラ

イカナイから魚がたくさん寄ることと渡海安全の祈願を依頼していた。

Fの大漁と渡海安全の祈願は、この海人たちの願いに応えたものである。

### 久高人の一年間の加護

G七二 ウヌトウシヌイチネンジュウ この年の一年中

七三 シナフミティ

七四 シユラフミティ

七五 リクヌワザスシン

七六 ウミヌワザスシン

七七 ハミサマ マムインソーチヨーティ

七八 ハミウミヨーガ

七九 ウガマリンソーリ

Gは久高人の一年間の加護を祈願している。

二段 以上、全体的な繁栄祈願(C)、豊作祈願(D)、女たちの精進

による祈願(E)、大漁と渡海安全の祈願(F)、久高人の一年間の加護

(G)は、諸々の祈願を述べている。これらを二段とする。

### 奉仕の誓い

H八〇 シナトウガミ

八一 トウマイウシジ

八二 リユーグチング

八三 ウティントウシ

八四 ニラートウシ

八五 ハナートウシ

八六 テインジトウシ

八七 ウティラトウシ

八八 マファエスベーラキ

八九 ウガマビイティ ハミヤビイティ

九〇 グウンゲワチヌ

〈みんなを喜めて(祝福して)〉

〈美しく喜めて(祝福して)〉

陸で働く人も

海で働く人も

神が讃えられるように

拝まれて下さい

港の神

泊の神(泊の御霊力)

竜宮

天に遥拝し(通し)

ニラに遥拝し(ニライに通し)

ハラに遥拝し(カナイに通し)

天と地に遥拝し(通し)

お寺(聖地)に遥拝し(通し)

真南のスベーラキ(スベー嶽を)

拝み奉り(拝みまして載きまして)

五月の



九一 ウフマッティヤ

大祭は

九二 ユクユイン ウガマッティ なお一層 拝まれて

九三 タボーリ

下さい

八七のウティラは聖地の義である。九〇の「五月」は麦の初穂祭の場合は「三月」が、粟の初穂祭の場合は「六月」が正しい。Hは神々を拝み、三月の麦の収穫祭、あるいは六月の粟の収穫祭でさらに拝む、と誓っている。

三段 以上、奉仕の誓いを述べる段を三段とする。

三段構成 以上、一段は祭りの準備が整ったことを述べ、二段は諸々の祈願を述べ、三段は奉仕の誓いを述べている。この三段構成は久高島の神歌に一般的にみられる様式である。

安泉松雄の採録 安泉松雄「一九七九、五四頁」は、「月ごとの祭のオモロ」の「正月祭(マブツチ祭)」として次の詞章を採録している。表題はオモロとあるものの、「持ち前」である。段落ごとの小見出しやA・Bなどの段落区分、節を示す数字、共通語訳は筆者が付した。なお、小見出しやA・Bは比嘉の採録と対応している。

#### ノロたちの精進

A一 あかつみーが

アキナミ 赤人ミーが

二 ばいていめーぬ

管掌している

三 朝川の 川のうびー

朝井の 井の御水撫で

四 五清み

五回の清め(精進)

五 七清み

七回の清め(精進)

六 御先ら

ウサチ(神饌)を

七 うさぎのーち

捧げて(押し上げ申し)

八 前男前女

メーイキガ(一人前の男)

九 五清み

メーイナゲ(一人前の女)

五回の清め

一〇 七清み

七回の清め

一一 そーじ

精進(禊)を

一二 きれーとて

立派にとて

四・五は九・一〇と重複しており、明らかに衍文になっている。また、神饌を述べる六・七は祭場の準備を述べるBの衍文であり、一人前の男女を述べる八は全体的な繁栄祈願を述べるCの一五と重複して、これも衍文だろう。なぜなら、神饌を述べるのはBの主題(祭場の準備)に適合し、また神饌は一人前の男しか供出しておらず、一人前の女の全員が早朝にヤグル井で清め(禊)をしていない(禊は基本的にノロだけがしている)からである。すなわち、六・七と八はノロの精進を述べるAにあつて異質な詞章である。Aは、赤人ミーが管掌しているヤグル井でノロが朝早く精進(禊)している、と述べている。この段は、比嘉採録の持ち前のAに相当している。

#### 祭場の準備

B一三 あむとから

三アムトウ(外間根家、両ノ

口家)から

一四 あさんはり

一般のシマ人から

一三・一四は量り前で祭料を徴収することを述べる類句なので、量り前を述べていることになる。類型から見ると、これに続いてこれらの祭料で神饌を作り、祭場に供えるという詞章があるべきである。こうしてみると、神饌を述べるAの六・七はBにあるのが本当だろう。Bは量り前で集めた祭料で作った立派な神饌を祭場に供え、祭場の準備が整っている、と述べている。この段は、比嘉採録の持ち前のBに相当している。

以上、一段全体で祭りの準備が整ったことを述べている。

## 全体的な繁栄祈願

## C 一五 前男前女

一六 んなまじり

一七 だきふみて

一八 一年中どー

一九 がんぢゅーさ

二〇 体じゆうさ

二一 島ん旅ん儲かふう

二二 うたびんそうり

Cはシマ(村落共同体)の一人前の男女を中心としたみんなの祝福、健康、儲けなど、シマの全体的な繁栄祈願を述べている。こうしてみると、八は一五の衍文だろう。この段は、比嘉採録の持ち前のCに相当している。

以上、Cは諸々の祈願を述べる二段の断片である。

三段がない。安泉の採録した詞章はかなり省略が激しく、錯誤も多い。

**持ち前の構造** 以上、持ち前の構造を一覧にすると、表7になる。

表7 持ち前の構造の一覧表

段落区分	主 題	
	比嘉	安泉
一段	A	ノロたちの精進
	B	祭場の準備
	C	全体的な繁栄祈願
二段	D	豊作祈願
	E	女たちの精進による祈願
	F	大漁と渡海安全の祈願
	G	久高人の一年間の加護
三段	H	奉仕の誓い

※ ○×は有無を示す。

**儀礼と穀物起源伝承の対応** 以上、持ち前は祭りの次第を辿り、祈願を述べているので、持ち前のモチーフと島の穀物起源伝承との対応

は以下のように多岐にわたっている。「ノロたちの精進」は島の穀物起源伝承のうち、「A種物を得た者」・「D精進(禊)の状況」、「祭場の準備」は「C種物が入っていた容器」、「豊作祈願」は「E得た穀物の種の種類」・「I久高島の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり」に対応している。

## 4 アザカでマブツチを扇ぎ、男たちが食べる

ii アザカでマブツチを扇ぐ 持ち前が終わると、両ノロはアザカでマブツチの上を三回扇ぐ。この所作の意味は確かでないものの、神饌のマブツチを聖なる葉で祓い清め、さらには男たちの種の能力を高めているだろう(後述)。

**男たちがマブツチを食べる** 祭りが終わると、参列している男たちはこのマブツチを一匙だけ食べる。かつては島の男全員がこの祭りに参加し、ノロの拝んだマブツチを食べたという。また、マブツチを供えた家は、祭りが終わると残りを持ち帰り、男にだけ食べさせる。

**種の能力を高める** このマブツチは男性だけが食べているので、マブツチには男性に健康をもたらす霊力があるとわかる。その具体的な効用は、次の瓢箪ガーキの汁を勘案すると、女(畑)に孕ませる種(男性自身)の能力を高めることにある。初穂祭を男の祭り(健康祈願)とすることの内実が、ここにある。

なお、こうしてみると、アザカの葉がイザイホーの三日目のスジ(菜団子)を載せる祭具になり、四日目にナンチュの両耳を飾る祭具になっているのは、アザカの葉に繁栄をもたらす呪能があるからだとわかる。

**儀礼と穀物起源伝承の対応** 右の儀礼のうち、アザカでマブツチを

祓う儀礼は、島の穀物起源伝承のうち、(久高島の穀物儀礼(初穂祭など)のはじまり)に対応している。

また、このマブツチは次に述べる瓢箪ガークの汁と対になり、食物豊饒と子孫繁衍をもたらす霊物になっている。すなわち、この儀礼は島の穀物起源伝承を記す『遺老説傳』において「食物豊饒」と「子孫繁衍」を祈願して穀物の種物を得たというモチーフ(E得た穀物の種物の種類)に対応している。

## 5 神女たちが瓢箪ガークの汁を飲む

iii 神女たちが瓢箪ガークの汁を飲む 次いで、両ノロとその掟神が根ダムトウに座る。すると、親ウンスクが両ノロに初穂と聖水を入れ、瓢箪ガークを差し出し、両ノロがその汁を飲む。また、参列している神女たちもこれを飲むことになっている。

種の孕み マブツチは男性だけが食べるのに対して、瓢箪ガークの汁は女性だけが飲んでいいる。そこで、マブツチが男たちに幸・効用を与えているように、瓢箪ガークの汁も女性になんらかの幸・効用を与えているだろう。その幸・効用は、畑に穀物の種を孕むことであり、母胎に男の種を孕むことだ、と考えられる。すなわち、マブツチを食べて種を活性化させた男と瓢箪ガークの汁を飲んだ女は、祭りで象徴的に性の営みをしており、それによって穀物の孕みと子孫の孕みが期待されている。そして、三月と六月の収穫祭が穀物の出産を意味し、同時に子孫の出産をも意味している。現に収穫祭において、蒲葵の葉に新穀のンバイ(お握り)を供え、母親が女兒の新生児を抱いて初拝みと称して嶺廻りをしている。収穫祭を女の祭り(健康祈願)とすることの内実が、ここにある。こうしてみると、子作りを俗に「畑に種を蒔く」というのは、このような初穂儀礼に発しているとわかる。

高橋「一九九〇a、三九頁」は、「男たちがマブツチを口にするのは、(中略)麦の神霊―聖なる種を授与されたこと」であり、ノロ以下の神女が「チブルガークの麦穂と水を口中にした時、一つにはマブツチを醸成させることと、もう一つにはその体は一種の畑と化して新穂花を生育させる、いわば麦の母胎と考えられていたのではあるまいか。」と推論し、「かくて穀物と子孫の繁殖・豊饒がもたらされる」と述べている。麦に限った発言であるものの、これは粟にも言え、正鵠を射ているよう。

『遺老説傳』の食物豊饒と子孫繁衍 このように、瓢箪ガークのなかに入っている穀物の三穂とヤグル井の聖水に穀物豊饒と子孫繁衍の効用があるのを見ると、『遺老説傳』(その釈文が『久高島由来記』)に伝える穀物起源伝承の次の記述が、俄然その意味を鮮明にする。すなわち、始祖のシラ太郎と妣加那志が伊敷泊で「子孫繁衍、食物豊饒」を祈願したところ五穀の種子の入った白壺(瓢箪に相当)を入手し、その結果「五穀豊饒し、子孫繁衍し、遂に以て邑と為る」。このように、ニライカナイからもたらされた穀物の種物は「食物豊饒」のみならず、「子孫繁衍」をも保証する霊物だった。

すなわちここでは、儀礼と島の穀物起源伝承(C種物の入っていた容器)・(D精進(稷)の状況)・(E得た穀物の種物の種類)が対応している。

正月行事との対応 右のことは、久高島の正月行事でも見られることである。畠山「二〇〇六、四四七―四七〇頁」によると、正月行事の次第は次のようになっている。元日では子孫繁栄を司る根神が祝いの杯をまず外間根人(最高の男神人)に授け、性の営みによって男児の誕生を期待する神歌(東方のフェーナガーク)をうたう。また、芋(甘藷)の豊作祈願をする(久高島の正月は芋正月でもある)。次いで、島の男たちに祝いの杯を授け、それから女たちに祝いの杯を授ける。

中の二日目は初起こしで、女は畑で豊作を祈願し、男は浜で大漁を祈願する。

三日目にはまず島の女たちに祝いの杯を授け、次いで男たちに祝いの杯を授ける。このように元日と三日目の次第が逆になるのは、三日目になると、女たちが子供に恵まれて子孫に囲まれるからだという。

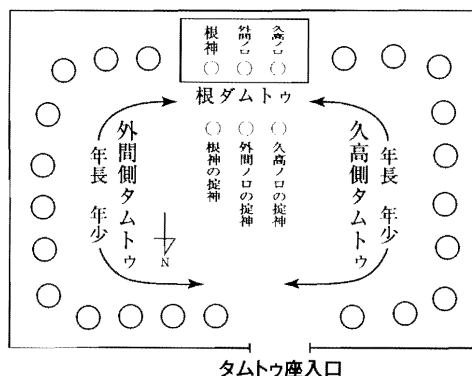
これは、元日の性の営みが早くも三日目に叶ったことを意味している。この正月行事の次第における因果の関係は、初穂祭(大漁祈願のフカラを含む)と収穫祭(大漁感謝のクカウを含む)における因果の関係と同じである。すなわち、初穂祭(フカラクを含む)によって「食物豊饒」と「子孫繁衍」ならびに「大漁」が図られ、収穫祭(クカウを含む)によってそれらが叶えられている。

## 6 赤人ミーと根人の神酒上げ

**タムトウ座の配置** 次いで、両ノロとその掟神はハブイ(冠)を被り、タムトウ座の所定の座に座る。

### 図3 外間殿のタムトウ座の配置

(比嘉康雄、1993b、23頁より。  
ただし一部変更)



**iv 赤人ミーと根人の神酒上げ** 祭場には樽真神酒の桶が二つある。一つ目の桶は柄杓取りが親ウンサクの持つアシクム(台付きの木椀)に樽真神酒を配り、二つ目の桶は村頭が弟ウンサクの持つ木椀に樽真神酒を配る。

かつては次に、赤人ミーと両根人の神酒上げが執り行われていたという。すなわち、赤人ミー、両根人の三人が、柄杓取りから注いでもらった一膳(四椀)の樽真神酒をタムトウ座まで三回運び、親ウンサクの取り次ぎによって、赤人ミーの神酒を根神に、外間根人の神酒を外間ノロに、久高根人の神酒を久高ノロに、それぞれ捧げたという。これは男社会が神女社会に敬意を払った挨拶だ、と考えられる。

**儀礼と穀物起源伝承の対応** この神酒上げのなかに赤人ミーがおり、両根人の上座にいることに注目したい。すなわち、赤人ミーは島の穀物起源伝承で穀物を入手した主役の一人なので、神酒上げの儀礼で別格の扱いになっている。

また、両根人が司祭者の身内の神女・ノロに神酒上げをしているのを見ると、赤人ミーが神酒を献上する相手も本来は身内の神女・シマリ妣だった、と想定できよう。すなわち、島の穀物起源伝承によると、赤人ミーとその身内のシマリ妣(夫婦であり、同時に兄妹だとも考えられる)が協力して穀物の種物を入手して穀物儀礼を始めているので、赤人ミーが神酒を献上する相手は司祭者・姉(妹)神のシマリ妣だった筈である。これはさらに穀物の種物を得た他の主役たち(夫婦であり、同時に兄妹だとも考えられる)にも敷衍でき、かつてシラ太郎が妣加那志に、アナゴノ子がアナゴノ姥に、それぞれ神酒上げた儀礼の存在をも想定させる。

とすると、ノロ制度が導入される以前の根人が神酒を上げる相手も、根人と兄妹(擬制的であるにしろ)関係にある姉(妹)神・根神に限定されてくる。

以上から、(1)神酒上げのプロトタイプ(原型)の中核は、赤人ミー(シラ太郎、アナゴノ子)が神酒をシマリ妣(妣加那志、アナゴノ姥)に捧げる祭式にあり、これに準じたのが島の最高神人である根人から根神に対する神酒上げ、すなわち外間根人の神酒を外間根神(外間村の根神)に、久高根人の神酒を大里根神(久高村の根神)に捧げる祭式だった、と想定できる。これが、(2)王権の強化に伴って両村に穀物儀札の祭祀権を握るノロが設置され、一般神女組織(タムトウ、ウンサク、ヤジク、ナンチュ)も拡充され、両根神も交互に就任することになって、現行の祭式に落着した、と想定できる。

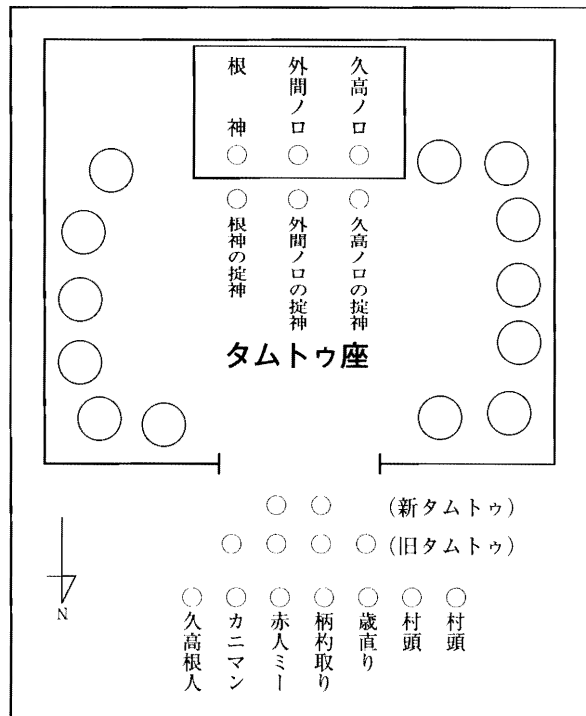
すなわちここでも、儀札と島の穀物起源伝承(A種物を得た者)が対応している。

## 7 新タムトウの加入式(粟の初穂祭のみ)

▽新タムトウの加入式(粟の初穂祭のみ) 次に、粟の初穂祭でのみ、新タムトウがタムトウ座に加入する式をする。まず、一列目に新タムトウがタムトウ座に向かって横列し、二列目に前年に昇任したタムトウが横列し、三列目に男神人(ソールイを除く)、村頭、歳直り(巳歳生まれの男)が横列する。歳直りが参列するのは、巳歳生まれが縁起がいいからである。この歳直りは、本来イザイホーで新タムトウと姉(妹)神関係を結んだ兄(弟)のなかから選ばれる。しかし、新タムトウの兄(弟)が巳歳生まれでない場合があるので、その時は巳歳生まれの男(歳直り)を代理人に立てる。

図4 外間殿における新タムトウの加入式

(比嘉康雄、1993b、34頁より。ただし一部変更)



一、二列目の新旧のタムトウが蒲葵扇を両手で持ち、新タムトウ一人あたり礼拝を四回し(四つの拝という)、男たちは合掌して礼拝する。四つの拝は、東西南北の神々への礼拝である。

次いで、歳直りがノロ以下の高級神女と先輩のタムトウたちに神酒上げをし、それからタムトウ座に座った新タムトウに神酒上げをする。これは、新タムトウの兄(弟)から高級神女、先輩のタムトウ、姉(妹)神としての新タムトウへの挨拶である。

以上の次第は、タムトウの仲間入りをする新タムトウとその兄(弟)の挨拶だ、と考えられる。

## 8 ウンサクの神酒上げ

vi ウンサクの神酒上げ 次いで、ウンサクの神酒上げが本格的に執り行われる。この神酒上げは、この祭りの中核部である(表8参照)。

表8 ウンサクの神酒上げの次第

(比嘉、1993b、26頁を基にして作成)

場所	親ウンサクの動き	弟ウンサクの動き
元屋	元屋の神々へ	
タムトウ座	両ノロと根神へ(3回)	タムトウ座の全員へ(両ノロと根神を含む)(奇数回)
タムトウ座	東西南北の神々へ(四つの拝)(4回)	
タムトウ座	両ノロと根神へ(4回)	
タムトウ座	赤人ミ、両根人、男神人、居神へ	赤人ミ、両根人、男神人、居神、大主、村頭、その他の参列者へ
以外の座	●国王(麦の初穂祭)・開得人君など王府関係者(麦・粟の初穂祭) ニライカナイの神々へ(東方遥拝)	●国王(麦の初穂祭)・開得人君など王府関係者(麦・粟の初穂祭) ニライカナイの神々へ(東方遥拝)

●は想定

樽真神酒の桶は二か所に置かれている。一つ目の桶は柄杓取りの所  
にあり、柄杓取りが両ノロと根神とその掟神に神酒上げをする三名の  
親ウンサクの捧げるアシクム(台付きの木碗)に柄杓で神酒を注ぐ。  
三名の親ウンサクのうち、両ノロの親ウンサクは精進姿の白一色であ  
るのに対して、根神の親ウンサクは白いウチギに紺地を羽織っている。  
二つ目の桶は村頭の所にあり、村頭がタムトウたちに神酒上げをする  
四名の弟ウンサクの捧げる木碗に柄杓で注ぐ。

元家の神々への神酒上げ まず、神酒を膳に四碗載せて、弟ウンサ  
クがイチヤリ小家などの元家の神々に供える。イチヤリ小は、久高島  
を作ったといわれるアマミヤ神を祭る元家である。

両ノロと根神への神酒上げ 次いで、各親ウンサク(三名)が神酒を  
両ノロと根神へ捧げる。すなわち、外間ノロ付きの親ウンサクは外間  
ノロへ、久高ノロ付きの親ウンサクは久高ノロへ、根神付きの親ウン  
サクは根神へ捧げる。これを三回繰り返す。

東西南北の神々へ(四つの拝) 次いで、各親ウンサクがタムトウ座  
の入り口でノロたちと正対して立ち、神酒を捧げる所作をする。これ  
を四回繰り返す。これは東西南北の神々への神酒上げで、四つの拝と  
いう。

両ノロと根神への神酒上げ 次いで、各親ウンサクが前述の要領で  
両ノロと根神へ捧げる。これを四回繰り返す。結局、親ウンサクは両  
ノロと根神へ神酒上げを七回している。

赤人ミ、両根人、男神人、居神への神酒上げ 次いで、各親ウン  
サクが赤人ミと両根人へ捧げる。すなわち、根神付きの親ウンサク  
は赤人ミへ、外間ノロ付きの親ウンサクは外間根人へ、久高ノロ付  
きの親ウンサクは久高根人へ捧げる。それから、各親ウンサクが男神  
人と居神へ捧げる。

ニライカナイへの報告 最後に、各親ウンサクは外間殿の前で膝立  
て座りをして東方を向き、神酒を捧げて拝む。これは親ウンサクの神  
酒上げの終了をニライカナイに報告している、と考えられる。

タムトウ座の全員への神酒上げ 弟ウンサクの神酒上げは、親ウン  
サクの行う四つの拝が終了してから始める。弟ウンサクが両ノロ、根  
神、掟神、タムトウへ捧げる。これを何回も繰り返し、数えきれない  
ものの、縁起のいい奇数(陽数)回だ、と考えられる。

赤人ミ、両根人、男神人、居神、大主、村頭、その他の参列者へ

**の神酒上げ** 次いで、弟ウンサクが赤人ミーと両根人へ捧げる。それから、弟ウンサクが男神人、居神、大主、村頭、その他の参列者(島人や見学者)へ捧げる。

**ニライカナイへの報告** 最後に、弟ウンサクは外間殿の前で膝立て座りをして東方を向き、神酒を捧げて拝む。これも弟ウンサクの神酒上げの終了をニライカナイに報告している、と考えられる。

**儀礼と穀物起源伝承の対応** ここでも赤人ミーが両根人より上座におり、儀礼と島の穀物起源伝承(「A種物を得た者」)が対応している。また、穀物儀礼の中核である神酒上げは、島の穀物起源伝承(「I久高島の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり」)に対応している。すなわち、前述したように(1)穀物の種物を島人に頒布した始祖に感謝して、その始祖の後裔である神人(シマリ妣、妣加那志、アナゴノ姥)に収穫物で醸した神酒を献上した儀礼が神酒上げの原型であることを示唆している。これが、島で整備され、外間根人が外間根神に、と考えられる。大里根神に、それぞれ神酒上げする儀礼が付加された、と考えられる。そしてさらに、(2)王権の強化によって穀物儀礼の祭祀権がノロに委譲され、神酒献上の中心がノロになり、儀礼を莊嚴化して島の一般神女組織のタムトウにも神酒が献上され、神酒上げをするウンサク(親ウンサク・弟ウンサク)も設けられるようになった、と推測される。

**祭具の撤去** 神酒上げが終わると、両ノロの使ったアザカの束と神女たちの座ったタムトウ(神座)が、外間山に収められる。

以上で、外間殿での朝拝みが終わる。

## 9 祭場の移動

**vii祭場の移動** 直ちに、両根人を先頭にした男たち、次いでノロを先頭にした神女たちが次の祭場の御殿庭に移動する。

**ウムイ** 戦前、外間殿から御殿庭に至る道行きで、行列の先頭に立った両根人が根人旗をかざしながら次のウムイをうたったという。引用は比嘉「一九九三b、二七頁」による。なお、節を示す数字、へへの共通語訳は筆者が付した。

一 トウンヌウフヌル

二 フボームイ ハキワタチ

三 ビンコウハラテイ トウーイ

四 ウガマッテイ タボーリ

外間ノロ(外間殿の大ノロよ)  
蒲葵御嶽 祈願して(蒲葵御嶽に 懸け渡し)

供え物を飾って 全島人

(瓶子と御香を飾って みんなのことを)  
あがめ奉れて 下さい  
(拝んで ください)

このウムイは、両根人が島人を代表して外間ノロに島人の幸せを祈願してください、と願ったものである。

## 10 御殿庭での朝拝み

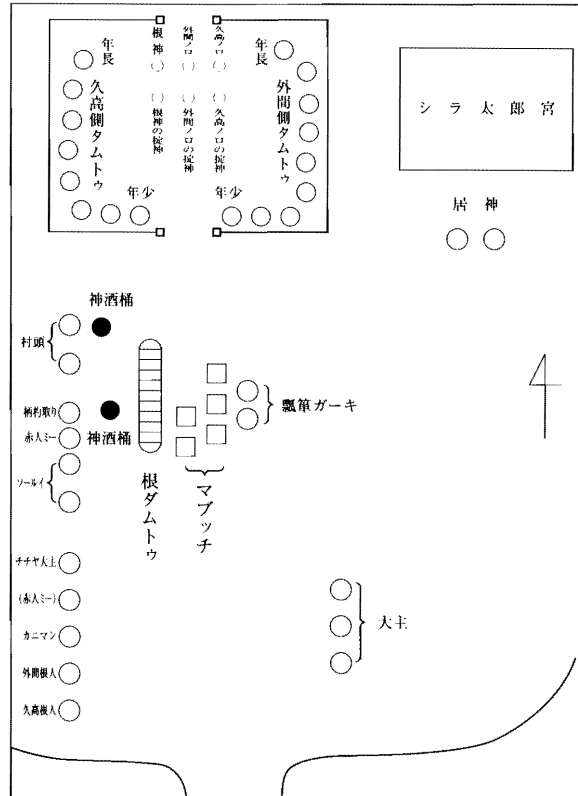
**御殿庭での朝拝み** 次いで、御殿庭での朝拝み(朝祭りとも)が始まる。

以下の御殿庭での朝拝みは、右とほとんど同じ儀礼の反復である。以下、外間殿での儀礼と違う点だけを記す。

**御殿庭の配置** 関係者は御殿庭の所定の座に着く。

図5 御殿庭の配置

(比嘉、1993b、28頁より。ただし、一部表記を変更)



アシャギがタムトウ座になつており、久高ノロが中央に座る。居神はシラ太郎宮の前に座る。当初、赤人ミは柄杓取りとともに神酒桶の傍らに座を占めるものの、途中から別の座にいる。

**vi ウンサクの神酒上げ** 元屋の神々への神酒上げとして根神の親ウンスクが柄杓取りから神酒を注いでもらい、大里家に供える。大里家は赤人ミ・シマリ妣を始祖としている。

**祭具の撤去** 神酒上げが終わると、両ノロの使ったアザカの束と神女たちの座ったタムトウ(神座)が、御殿庭の東側の道路脇に収められる。

御殿庭の朝拝みは一一時ごろに終わる。

## 11 国王などへの神酒上げ

**国王(当職)・聞得大君など王府関係者への神酒上げ** 一六七三年以後、麦の初穂祭への国王の参列が当職の代参になるものの、国王の代理人(当職)をはじめとした王府関係者(聞得大君を含む)が久高島の麦と粟の穀物儀礼に参列していた。そして、麦の初穂祭の朝拝みは島の初穂祭であるものの、当職・聞得大君などの王府関係者も参列し、親ウンスクの捧げる神酒を納受していた、と想定される。その根拠として次の二点が考えられる。

**王府の祭式** その一は、神酒上げの様式が極めて複雑で洗練されており、王府の祭式としての様式美すら感じさせることである。神酒上げを職掌とするウンサクを親ウンスクと弟ウンサクに二分し、神々、神人、来賓へと遺漏なく優雅に神酒を献上している。

夕拝みの神酒上げは、朝拝みの神酒上げと同じ様式を持っている。この夕拝みが王府の穀物儀礼だとすると、この夕拝みの王府流の神酒上げを島の穀物儀礼の朝拝みに導入する契機がなければならない。その契機は、国王(その代理人)・聞得大君などの王府関係者が朝拝みに参列していたことによる、と考えられる。すなわち、王府の主催する夕拝みにノロ以下の島の神人が参列しているように、国王(その代理人)・聞得大君などの王府関係者も島の主催する朝拝みに参列していればこそ、王府の神酒上げも島の祭祀(朝拝み)に導入されたのではなかろうか。もし島と王府の祭祀の間にこのような交流がなければ、島の在来の祭式と王府の祭式は峻別されていた筈である。

**儀礼と穀物起源伝承の対応** その二は、今まで悉くといっているほどに儀礼と島の穀物起源伝承が対応してきているので、島の穀物起源伝承における(一琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり)に対応した儀礼がここにもなければならない、と類推できるからである。



その儀礼とは、島人の国王(その代理人)への神酒上げに象徴化されている。すなわち、(Ⅰ麦が熟した春、王に献上)し、(Ⅰ琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり)になり、(Ⅰ二月の久高島行幸のはじまり)になったという、島の麦の穀物起源伝承が、国王への神酒上げに対応している、と類推できる。そして、久高島が王府に敬愛の眼差しをもつて麦を中心とした穀物起源伝承を語り、それを儀礼化、祭式化していることは、王府にとって極めて喜ばしいことである。当然、国王(王府関係者)はこの神酒上げを喜んで納受したろう。この神酒上げの説話的な表現が、『遺老説傳』と『久高島由来記』における「二月に至り、其の麦已に熟し、恭しく吉旦を択び、其の麦を奉献す。王深く之れを喜び、而して之れを頂戴し」であり、『琉球國由来記』(2)における「此麦成熟時、捧干朝廷。聖上詔宣ク、是レ人民養育スル穀物ト。御歡喜不レ斜」などである。

このように穀物起源伝承における麦の新穀の献上は、麦の初穂祭では麦の新穀で醸した神酒を献上する次第に儀礼化されている、と考えべきである。この国王(王府関係者)への神酒上げによって、島人が語る麦の穀物起源伝承のうち、王府との緊密な関係を示す(Ⅰ琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり)の儀礼化が図られている。もし島と王府の祭式の間に右のような交流(両者の同席)がなければ、儀礼上の峻別に対応して島の穀物起源伝承にも島と王府との緊密な交流を語る条がない筈である。

## 12 国王などの神座

**国王(当職)・聞得大君などの王府関係者の神座** では、筆者の説くように朝拝みに国王、その当職、聞得大君、その他の王府の関係者が列席していたとすると、その神座はどこにあつたのだろうか。

**外間殿の場合** 外間殿では、外間殿(外間拝殿とも)に王府関係者が座を占めた、と考えられる。伊従勉「二〇〇五、三三六―三六一頁」によると、外間殿に張る「赤綾屏風」は本来「金の屏風」であり、かつて聞得大君が直接年中祭祀を司祭することによって久高島に伝わった王府祭場設営の方法の痕跡を留めているという。畠山「二〇〇六、三七〇頁」によると、四月のカンジャナシーの三日目にうたわれる「東大主の元テイル」のCで、外間殿に張る「赤綾屏風」は「チ(ギ)ンガミョープ」すなわち「金が屏風」(あるいは「聞得大君が屏風」と対句になっている。とすると、外間殿の赤綾屏風の下に王府関係の君々(国王や大君など)が座っていた、と考えられる。

そして、現行ではこの赤綾屏風を張る外間殿に、どの祭りでも來賓格の高級神女や女性の居神が座っている。

**御殿庭の場合** この点、御殿庭では、王府関係者の神座はどこにあつたのだろうか。久高島の祭場を「御殿庭」と称するのは、かつてここに国王や聞得大君などの用いる「御殿」があつたからである。当然、この「御殿」に王府関係者が座っていた、と考えられる。

この御殿の取り壊しに関する記事が、『球陽』尚貞王九年(一六七七)の条にある。その取り壊しは、国王の久高島行幸が尚貞王五年(一六七三)に取りやめになったことを受けてのことだった、と推定できる。しかし、御殿の取り壊しがあっても、祭りにおいてはその場所が王府関係者の神座だった、と考えられる。

その具体的な場所は今日では不明である。しかし、どの祭りにおい

でも、祭りに直接かわからない来賓格の高級神女や女性の居神の座は、現在のシラ太郎宮の前である。シラ太郎宮は一九七七年（昭和五二）創建の拝殿であり、それまでは更地だった。

こうしてみると、外間殿に赤綾屏風が張られ、その下に来賓格の高級神女や居神が座を占めているので、シラ太郎宮のあたりがかつての「御殿」の跡だった、と考えられる。「御殿」があった時代には、外間殿と同様に赤綾屏風が張られていただろう。御殿庭を発掘する時代が到来し、その時の考古学上の成果が筆者の説を補強することを期待したい。

## 一〇 フカラク

### 1 両祭場でのフカラク

**外間殿でのフカラク** 次いで、フカラクという共食儀礼が外間殿と御殿庭のタルガナーで執り行われる。タルガナーは現在では煤乾屋になっているものの、かつての久高根屋で、久高ノロの香炉を置いてある。

外間殿でのフカラクへの参加者は外間ノロ、外間根神、その各掟神、親ウンサク、外間根人などである。神饌は魚料理とビザイサンニ（糯米で作った大きなお握り）である。魚は昨日、兄ソールイがフカラク魚として提供したものである。ビザイサンニは、外間ノロ殿内と外間根屋が交互に作る。外間ノロ殿内が当番の時は、外間ノロ殿内が糯米を出して中外間家で作る。それはこの家に島の始祖のシラ太郎・毗加那志がやってきたからとも、この家からかつてノロが出たからともいう。これは、外間殿の朝拝みに先立って両ノロが中外間家の庭のイビに麦の初穂を供えて拝む事情と同じである。

これらの神饌を供えて、外間ノロが大漁と渡海安全を祈願し、それからみんなで食べる。

**御殿庭でのフカラク** 御殿庭でのフカラクへの参加者は、久高ノロ、

その掟神、親ウンサク、久高根人、両村頭夫婦などである。両村頭夫婦が久高ノロの祭場に参列しているのは、彼らが久高ノロの兼務する東大主の管理するエラブウナギ漁に従事しているからである。神饌はやはり魚とビザイサンニである。魚は昨日弟ソールイがフカラク魚として提供したものである。ビザイサンニ（お握り）は、久高ノロ殿内と村頭家が交互に作る。

これらの神饌を供えて、久高ノロが大漁と渡海安全を祈願し、それからみんなで食べる。

### 2 ニライカナイからの寄り物

**大漁と渡海安全の祈願** 比嘉「一九九三、三二頁」は、フカラクをビザイサンニだ、と考えている。しかし、フカラクの語義はわかっていない。また、ビザイサンニの料は両ノロ殿内と村頭が出していて、特定の集団に限られているのに対し、フカラク魚は大漁と渡海安全を祈願する立場にある両ソールイが出している。また、両村頭夫婦は東大主（久高ノロが兼務）が漁業権を持つエラブウナギ漁に従事しているもので、久高ノロの祭場に参列している。畠山「二〇〇六、三四九（四二六頁）」によると、四月と九月に執り行われるカンジャナシーを見ると、エラブウナギもニライカナイからの寄り物である。

こうしてみると、このフカラクという儀礼は男（海人）の大漁と渡海安全の祈願を込めたフカラク魚が主で、ビザイサンニが添え物である。ニライカナイから穀物の種物が漂着した穀物起源伝承に基づいた初穂祭にちなみ、同じくニライカナイからの寄り物である魚

も島にたくさん寄せ、渡海安全も保証してほしい、と司祭者のノロにフカラク魚を献上して依頼している、と考えられる。

この男たちの祈願に依えて、司祭者のノロは「持ち前」で大漁と渡海安全の祈願をし、さらにここでフカラクとして儀礼化している、と考えられる。

**収穫祭のクカウーとの呼応** この初穂祭に付随するフカラクは、収穫祭に付随するクカウー(大漁感謝)と呼応しているよう。フとクは島では音相通なので、フカラクの「フカ」とクカウーの「クカ」は同義かもしれない。

### 3 国王への魚献上

**国王の招請** 以上は、王府がかかわらない段階での初穂祭におけるフカラクの位相である。

しかし、国王、その当職(国王の代理人)、<sup>キヤウ</sup>開得大君、その他の王府の関係者が朝拝みに列席し、神酒上げを納受するようになると、フカラクにも国王、その当職などの王府の関係者を招請し、国王などにもフカラク魚の料理を献上した、と考えられる。すなわち、国王は隔年に一回、麦の初穂祭に親しく久高島に行幸し、神酒上げを納受し、フカラク魚も納受しただろう。

**王城の国王への魚献上** しかし、その隔年の行幸も『羽地仕置』(一六七三年)によって当職に代わり、国王自らの久高島行幸はなくなった。そこで、国王の久高渡島に代わって久高側が王城に向く儀礼を考え出し、公事ノロの外間ノロとその出自家の外間根人が毎年、王城の国王に魚を献上し、国王がこれを納受したのではなからうか。

**黄金の瓜種** それを語るのが、『遺老説傳』(ならびに『久高島由来記』)の(「黄金の瓜種」の(「久高島行幸・魚献上など」の由来のう

ちの(「魚献上」だ、と考えられる。

(「黄金の瓜種」は二次的な穀物起源伝承で、次の二部から成っている。すなわち、(一)久高島出自の巫女・思樽<sup>オモヅル</sup>を母とするa<sup>オモツカ</sup>思金松兼がb伊敷浜でニライカナイからの寄り物であるc黄金の瓜種を入手し、これを梃子にして父王に会って父子の名乗りを上げ、やがて国王(西威王)になったという説話を基にして、(二)「聖主、二年に一次、親しく久高島に幸す。且つ毎年一次、外間根人並びに祝女、御仲間より、恭しく魚類数品を献ず。則ち祝女を、内院に召し入れ、盛宴及び茶業・煙草等の物を恩賜す。根人にも亦御玉貫一双を賜ふ。」という歴史事象(「久高島行幸・魚献上など」が生じたと言く。

この(二)のうち、「聖主、二年に一次、親しく久高島に幸す。」(「久高島行幸」は、一六七三年に国王から当職に変更されている。この(「久高島行幸」が当職へ変更になったことが、王城の国王への(「魚献上」を生み出した背景だった。久高側の王権に対する接近にはかほどに熱いものがあり、これが『遺老説傳』(ならびに『久高島由来記』)の(「黄金の瓜種」に反映されている。

しかし、この王城への魚献上という久高側の苦肉の策も、王府の判断によって「康熙庚子、其の献物を裁去す」としか云ふ。」とあって、一七二〇年(尚敬王八年)に廃絶している。

**儀礼と穀物起源伝承の対応** このように、(1)本来のフカラクはノロが海人(その代表のソールイ)の献上する魚を神饌にしてニライカナイに大漁と渡海安全を祈願する儀礼であり、それが(2)王権とかかわることでもフカラクはノロと根人が国王へ魚を献上する儀礼を加上し、さらには(3)外間根人と外間ノロが王城の国王へ魚を献上する儀礼にまで変容した、と考えられる。

そして、これらの儀礼のうち特に(3)を反映して新たな語り(「黄金の瓜種」を用いて(「久高島行幸・魚献上など」の由来を説いた、と

考えられる。

こうしてみると、穀物起源伝承で「王城の国王に魚を献上する条は、フカラクと密接に連動している」とわかる。そして、この「（「魚献上」に連動するフカラクに至って、島人の熱心に語る麦の穀物起源伝承のうち、王府との緊密な関係を示す「琉球の穀物儀礼（麦の初穂祭など）のはじまり」の儀礼化が完了することになる。

**フカラクは島の祭祀** こうしてみると、フカラクは島の論理で貫かれた島の祭祀だとわかる。したがって、王府の祭祀である夕拝みにフカラクが付随するのは誤伝だ、と考えられる。

## 一一 結び — 島の論理 —

**麦と粟の穀物儀礼** 久高島では、現行の穀物儀礼（初穂祭と収穫祭）として麦と粟の四つの儀礼が執り行われている。この四つの穀物儀礼は、基本的に一日目の「朝拝み（朝祭りとも）」と一・二日目の「夕拝み（夕祭りとも）」の二部から構成され、初穂祭に限って「精進」が付随している。

**久高島と王府の穀物儀礼** この四つの穀物儀礼は、現行では久高島の神人だけが執り行っており、どの儀礼も久高島の穀物儀礼のように見える。しかし、歴史上の事実として王府が瓦解する一八七九年（明治一二）まで王府は麦と粟の穀物儀礼を久高島で執り行っていた。

この点、王府が執り行っていたかつての穀物儀礼が現行の儀礼のなかに痕跡を止めている、と考えた。すなわち、四つの穀物儀礼のうち、「朝拝み」と「精進」が久高島の祭祀であり、「夕拝み」が王府の祭祀だった、と想定した。

**麦と粟の初穂祭の朝拝み（精進を含む）** 本論ではこのうち、麦と粟の初穂祭の「朝拝み（精進を含む）」を取り上げ、この儀礼が久高島の論理で貫かれた島の祭祀だと論じた。

その論拠は、次の三つの視点に基づいている。

(1) **精進の期間** 初穂祭に付随する精進の期間が祭りの前々日から朝拝みまでになっており、夕拝みが島人に直接かわる祭りでないことを示している。これは、精進と朝拝みが一組であるとともに、朝拝み（精進を含む）と夕拝みが異質であることを示し、朝拝み（精進を含む）が島の祭祀、夕拝みが王府の祭祀であることを浮き彫りにしている。

(2) **朝拝み（精進を含む）と夕拝みによる神衣裳・祭具の相違** 朝拝み（精進を含む）におけるノロの神衣裳は精進姿である。このノロの精進姿は、島の穀物起源伝承（D精進（禊）の状況）にかなり対応している。

ただし、島の穀物起源伝承においてD精進（禊）して精進姿になりA種物を得た者は、赤人ミ・シマリ妣夫婦、シラ太郎・妣加那志夫婦、アナゴノ子・アナゴノ姥夫婦であり、ノロではない。この島の穀物起源伝承と現行の穀物儀礼において禊する者が一致しないことは、三組の夫婦の神役が穀物儀礼を執り行ったプロトタイプ（原型）を想定させる。

また、ノロはアザカの葉を束ねて扇にし、神饌を扇いでいる。

このように精進と朝拝みのノロが精進姿であり、アザカの扇で神饌を扇ぐのに対して、夕拝みのノロは表4に記したように、王府の様式に則って白い神衣裳に大衣の打ち掛けを着、首に曲玉を掛け、王府の下賜した絵描き扇（表に日輪と鳳凰、裏に月と牡丹を描き、王府の支配的なイデオロギーを象徴する）で神饌を扇いでいる。

このように、儀礼によるノロの神衣裳・祭具の相違は、精進と朝拝みがより原初的で島レベルにあり、夕拝みが王府のイデオロギーを

帯びていて王府レベルにあることを示している。

(3) **朝拝み(精進を含む)と島の穀物起源伝承の対応関係** (3) 朝拝み(精進を含む)と島の穀物起源伝承(語り)の対応関係は、次に列挙するように多い。

① 神女たちが座るタムトウ(神座)は、(E得た植物の種類の種類)・(H植物による久高島の御嶽のはじまり)に対応している。

② ノロを中心としたヤグル井での精進(禊)は、(D精進(禊)の状況)に対応している。

③ 赤人ミイが神酒桶の傍らに座を占め、根神に神酒上げしているのは、(A種物を得た者)・(B種物を得た場所)・(C種物の入っていた容器)・(D精進(禊)の状況)・(E得た穀物の種類の種類)・(F穀物の種物を蒔いた場所)に対応している。

④ アザカを蒲葵御嶽から採取し、その葉でマブツチを扇ぎ、男性だけがマブツチを食べることは、(E得た穀物の種類の種類)・(H植物による久高島の御嶽のはじまり)・(I久高島の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり)に対応している。とくに男性だけがマブツチを食べることは、『遺老説傳』の(E得た穀物の種類の種類)・(食物豊饒・子孫繁衍)に対応している。

⑤ 穀物(麦・粟)の三穂とヤグル井の聖水を入れた瓢箪ガークの汁を神女だけが飲むのは、(C種物の入っていた容器)・(D精進(禊)の状況)・(E得た穀物の種類の種類)・(F穀物の種物を蒔いた場所)に対応している。とくに神女だけが汁を飲むことは、『遺老説傳』の(E得た穀物の種類の種類)・(食物豊饒・子孫繁衍)に対応している。

⑥ 現行のウンサクの神酒上げ(島人だけの儀礼)は、(A種物を得た者)・(I久高島の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり)に対応している。

⑦ ウンサクの神酒上げのうち、国王をはじめとした王府関係者への神酒上げ(想定)は、(I麦が成熟する春、王に献上)・(I久高島と琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり)・(I二月の久高島行幸のはじまり)に対応している。

⑧ フカラクのうち、国王をはじめとした王府関係者への魚献上(想定)は、(I久高島行幸・魚献上など)に対応している。

右の対応関係のうち、最後の⑦・⑧の二点は島の王権への接近を物語っている。

以上、初穂祭の朝拝み(精進を含む)の伝承状況が良好である。そして、朝拝み(精進を含む)と久高島の穀物起源伝承(語り)の対応関係は、両者が島の論理のもとに緊密な相関・補完関係にあることを示している。この朝拝み(精進を含む)で描かれる祭祀世界は、当然のことながら島の穀物起源伝承の世界で完結している。そして、この儀礼と穀物起源伝承(語り)が対応する島の機構は、健在する島の祭祀組織と相俟ってこの祭りを強固に維持・継続させてきた、と考えられる。

**夕拝みと王府の穀物起源伝承の対応** これに対して、夕拝み(王府の祭祀)には省略が多く、その構造を辿ることが難しい。そして、この夕拝みは当然のことながら島の穀物起源伝承(語り)に対応していない。しかし、かといって王府の穀物起源伝承に緊密に対応しているかという、いささか希薄である。それでも、次の二点が対応関係にある。

① 絵描き扇で樽真神酒を扇ぐ所作は、『A種物を得た者』・(E得た穀物の種類の種類)・(F穀物の種物を蒔いた場所)・(I琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり)・(I二月の久高島行幸のはじまり)に対応している。

② 神酒上げは、『A種物を得た者』・(E得た穀物の種類の種類)・(F穀物の種物を蒔いた場所)・(I琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり)・(I二月の久高島行幸のはじまり)に対応している。

本来の夕拝みは王府の穀物起源伝承とものと緊密に対応し、夕拝みで描かれる祭祀世界は王府の穀物起源伝承であり、王府の論理で貫かれていた筈である。ところが、王府が瓦解して祭祀組織を失ったために、王府のイデオロギーを示す次第(儀礼)が大きく欠落し、王府に対する島人の敬愛の念によって島のかかわる次第(①絵描き扇で神酒を扇ぐ、②ウンサクの神酒上げ)だけが辛うじて残存した、と考えられる。すなわち、初穂祭の「夕拝み」と王府の穀物起源伝承(語り)の対応関係は本来持っていた緊密な相関・補完関係をかなり失っており、この両者の相関・補完関係の喪失は王府の祭祀組織の崩壊と連動している。これを換言すると、王府の穀物起源伝承は文献として残されたものの、王府の祭祀組織の崩壊が夕拝み(王府の祭祀)を衰弱させ、この儀礼の衰弱が王府の穀物起源伝承との対応をあらかた隠蔽してしまったといえる。

**三遷する朝拝み** また、初穂祭の「朝拝み(精進を含む)」と久高島の穀物起源伝承(語り)の緊密な対応関係をみてくると、島の初穂祭の「朝拝み」が三遷しているともわかる。

(1)朝拝みのプロトタイプ(原型)は、司祭者が(△種物を得た者)、すなわち赤人<sup>アカヒト</sup>・ミ・シマリ<sup>シマリ</sup>妣<sup>ハハ</sup>(あるいはシラ太郎<sup>シラタロウ</sup>・妣<sup>ハハ</sup>加那志<sup>カナシ</sup>、アナゴノ子<sup>アナゴノコ</sup>・アナゴノ姥<sup>オバ</sup>)であり、島の穀物起源伝承をなぞりながら彼らが精進(禊)をし、精進姿で朝拝みを執り行った、と想定される。そしてこれに、外間根人が外間根神に、久高根人が大里根神に神酒上げする儀礼が付加されたろう。

そこで展開される祭祀世界は島の穀物(麦・粟)の豊饒の祈願であり、男(種)の健康祈願である。その祭祀的論理は、初穂祭で活性化した男の種を女(畑)が孕み、収穫祭で女(畑)が穀物と子供(とくに女児)を出産することである。

また、穀物の種物がニライカナイからの寄り物であることにちなみ、

同じ寄り物である魚の大漁と渡海安全を祈願するフバワクも付随している。

これが、王府の宗教政策によって、(2)司祭者がノロになり、一般神女組織を再編し、島の穀物起源伝承をなぞりながらノロが精進(禊)をし、精進姿で朝拝みを執り行った、と想定される。

やがて、久高島が琉球の麦と粟の発祥地として王府の神の島になると、国王などの王府関係者が渡島して王府の穀物儀礼(夕拝み)を執り行うようになった。そこで、(3)さらに一般神女組織を拡充し、島の穀物儀礼(今の場合、初穂祭の朝拝み)にも国王などの王府関係者が参列し、ノロの司祭する朝拝みの後半で神酒を納受し、またフカラクで魚を納受していた、と想定される。

**島の論理と王府の論理** 以上、(1)精進の期間、(2)朝拝み(精進を含む)と夕拝みによる神衣裳・祭具の相違、(3)儀礼と穀物起源伝承の対応関係の視点から、久高島における麦と粟の初穂祭の朝拝み(精進を含む)が島の論理に基づいた島の祭祀であり、夕拝みが王府の論理に基づいた王府の祭祀だ、といえるだろう。

この三点に、前述したように(4)二度の夕拝みが王府関係者の久高渡島にかかわることを追加するなら、朝拝み(精進を含む)が島の祭祀であり、夕拝みが王府の祭祀であることは、ほぼ確定できるのではないだろうか。

以上がかつての久高島の初穂祭の実相だった。しかし、王府が瓦解して夕拝みが王府の祭祀であることを忘却し、①麦の初穂祭の祭日を王府が定めた二月から一月に変え、②初穂祭の朝拝み(精進を含む)の司祭者が外間ノロ、一日目の夕拝みの司祭者が久高ノロ、二日目の夕拝みの司祭者が根神(外間根神が大里根神)だ、と説明するようになった。これは、王府の論理が時間の経過とともに消滅したために相対的に島の論理が優先したことを意味している。そして、このように

島の論理が優先してきたために、王府の祭祀としての夕拝みがベールに包まれてきた、と考えられる。

# 引用文献・参考文献

- 赤嶺政信 二〇〇四 「地割組・マブッチ組・ヤドゥイー―久高島村落祭祀組織についての補遺―」『琉球大学法文学部 人間科学科紀要 人間科学 第14号』
- 安里進 二〇〇六 『琉球の王権とグスク』山川出版社
- 伊従勉 二〇〇五 『琉球祭祀空間の研究―カミとヒトの環境学―』中央公論美術出版
- 沖縄大百科事典刊行事務局 一九八三 『沖縄大百科事典(中)』沖縄タイムス
- 嘉手納宗徳 一九七八 『遺老説傳』角川書店
- 高橋六二 一九九〇a 「麦穂祭―久高島の祭祀」『古代文学29』 古代文学会
- 高橋六二 一九九〇b 「久高島由来譚」『跡見学園短期大学紀要26』
- 高橋六二 一九九〇c 「琉球王府の麦ノミシキヨマと麦穂祭」『南西日本の歴史と民俗』 第一書房
- 高橋六二 一九九一a 「麦穂祭―琉球の諸間切諸島の場合」『跡見学園短期大学紀要27』
- 高橋六二 一九九一b 「マブッチマツティー」『久高島の祭りと伝承』桜楓社
- 野本寛一 一九八四 「農耕―畑作の伝承と習俗」『沖縄県久高島の民俗』白帝社
- 島山篤 二〇〇六a 「沖縄の祭祀伝承の研究―儀礼・神歌・語り―」瑞木書房
- 比嘉実 一九九一 『古琉球の思想』沖縄タイムス
- 比嘉康雄 一九九三b 「神々の原郷 久高島 下巻」第一書房
- 安泉松雄 一九七九 「安泉松雄資料」『沖縄県久高島資料』白帝社
- 琉球政府文化財保護委員会 一九七二 『沖縄文化史辞典』東京堂出版